

In Vitro

パ

Pathologic  
Report

ト

レ

ソ

ロ

ジ

ツ

ポ

ー

ト



Report 01

# パトソロジックレポート

## Report 01

*Presented by*  
*In Vitro*

# 目次

熱月	
笛野	
メノ	..... 2
私と彼女のウェーバ	
落合未知	..... 138
あとながき	..... 194

## 熱月

笛野 メノ

### 第一章

「おいおい、頼むつて。俺マジで単位やばいんだよ。答え見せてくれ」

俺が大学の教室に到着すると、田所が久保田の肩を揺すっていた。田所は体格がいいので、細身の久保田はゆさゆさ揺られている。

今日は夏学期末の試験最終日だ。教室には緊張と樂觀が同居した独特の空気感が漂っている。

「だから答え作ってねえんだってば。大雑把にしか解いてないから」

久保田がそう答えると、田所はがつくりと項垂れた。そしてただちに起き上がり、今度は救いを求めるように辺りを見回し始めた。

そんな一連のやりとりを視界の端に捉えながら、俺は踵を返してゆつくりと彼らから距離をとっていく。昨晩あらゆる人脈と検索能力を駆使して作り上げた俺の血と涙の結晶（持ち込み資料）をみすみす人に譲るわけにはいかない。息を潜め、影を薄くして見つからないように。そおつと、そおーつと。抜き足、差し足、忍び足。

そうやってわざとらしく逃げていると、後ろからがしつと肩を掴まれた。

「岸本、いいところに来た。答え見せてくれ」

振り返ると田所が最高の笑顔を浮かべていた。

「おらおら、いっぱい食え。なんつったって俺の単位救済記念だかなー」

試験終了後、俺たちは大学近くのラーメン屋に来ていた。試験の資料を見せたお礼に、田所にラーメンを奢ってもらおう約束を取り付けたのだ。

「ずっと、とラーメンをすすする。」

「試験が終わったということは今日から夏休み。」

開放感！ 最高のラーメン！ しかも人の奢り！

「昨晚頑張った甲斐があつたぜ。」

「まだ単位とれたかはわかんねえだろ」

隣から声が聞こえたので顔を向けると、久保田がラーメンをすすつていた。気分上々の田所はなぜか久保田にもラーメンを奢つたらしい。あれ？ 俺の昨日の頑張りは？

「岸本の努力と久保田の頭脳を借りたんだから単位とれてないわけないだろ」

田所は自信たっぷりにそう言った。

そう堂々と努力とか言われるとこっちが恥ずかしくなってくる。俺は一晩で情報をかき集めただけだ。久保田の頭脳は本物だと思っけど。

「いや、僕何も力貸してないし」

確かにそうだ。おい、田所。もう一杯ラーメン奢れ。

「そもそも貸して力になれるような頭脳なんて持ってないし」

久保田が自信なさげに付け足す。

「いやいや、それは違うだろ」

「いやいや、それは違うって」

俺と田所のツツコミが重なった。

謙遜にも程がある。聞く人によつては嫌味にすら聞こえるかもしれないくらいだ。

「天下の Google 様で働く人が何を言うか」

田所が言うように、久保田は Google の研究所でバイトをしている。それもかなり深いところまで関わっているらしい。大学卒業後はそこで働くのだろう。

ちなみに「天下の」という表現は比喻でも何でもない。実際にここの特別経済自治区を治めているのは Google なのだ。

特別経済自治区というのは GAF A を筆頭とした超巨大企業が自治権の一部を日本国から委託され、統治している領地のことである。

日本国は当時（今もだが）、深刻な人口減少に悩まされていた。連鎖的に経済的困難や人材不足が発生し、その国難に打ち勝てるようなイノベーションも生まれなかった。

そんな中、当時の日本政府が目をつけたのが、国際社会で国家と同等レベルの実力をつけていた超巨大企業であった。政府は四千平方キロメートルほどの広大な土地（ちょうど滋賀県くらいの大さきだ）を次々と企業誘致に使うという前代



未聞の大政策転換を敢行し、ほとんど破綻しかかっていた財政の立て直しを図った。しかし、これほど広大な土地は一企業が受け持つには大きすぎたために買取手がなかなか現れず、企業側に譲歩する形で自治権の一部を委託することとなった。これは国民の自尊感情を傷つけ、大きな反発を生んだ。

日本政府はあくまで企業誘致の一形態であるとの認識を崩さず、そこを「特別経済自治区」と呼んだ。

一方、反発する国民は、これは国土の割譲であり、国家の切り売りであり、戦争を省略した敗戦であると訴え、そこを「企業領」と呼んだ。

だが、国民の反発とは裏腹に、超巨大企業は自治区内の人々に素晴らしい生活を提供した。技術による合理性と自然による遊びが融合した新しい街並み。居住地域の偏りを是正し、少ない人数で効率的に回るようになった経済。先端技術に触れられる充実した教育。自動化と効率化が進み、人々の余暇時間を削らなくなった交通。開放的で透明性の高い税政。

いずれをとっても人々の生活を豊かにするものであり、特別経済自治区内の人々からは反発の音が消えたのであった。

それから三十年が経過した今、国民から不満の音が上がることはほとんど無い。現在ではオーストラリアや東ヨーロッパの各国でも同様の政策が取り入れられ、国際的にも日本政府の政策が評価されてきている。こういった事情も国民から不満の音が上がらない一つの要因であるかもしれない。この政策に反発しているのは主に超巨大企業による陣取り合戦に巻き込まれ、自国の利益を損なうことを恐れる旧先進国の国々くらいのものである。

「最近バイト先で何をやっているんだ？」

俺は久保田にそう聞いた。

「これ、このアプリを作ったんだ。ダウンロードしてみて」

久保田が目の前の虚空を横にスワイプすると、俺の目の前に▶▶で画面が表示された。リンクをタップし、言われたアプリをダウンロードする。

「それで、それは何のアプリなんだ？」

横から見ていた田所が言った。

「とりあえず、何か音楽を聞いてみて」

久保田が言う。俺は言われた通り、いつも身につけているスマートグラスを操作し、音楽を流した。

その途端、世界の色が変わるような感動が訪れた。

「これ……どういう……？ 頭の中で直接音が鳴っているような……」

音質がクリアなんでもんじゃない。全ての穢れを落とした純真な天使が囁いたらこんな感じなんだろうか？

「そう。スマートグラスの先セルから出る超音波とヘッドセット部位から流れる微弱電流が連動して、共感覚を引き起こしているんだ。実際には音は流れてない。だからこうして会話することも違和感なくできる」

耳が塞がれていないので、久保田の声はいつもと同じように聞こえる。とても不思議な感覚だ。本当は音が流れてないなんて言われても信じられない。

「俺にも教えてくれよ」

田所に言われ、俺はさつき久保田から送られてきたダウンロードリンクを田所に転送する。操作中も音楽は途切れることなく頭の中で続いていた。

「もちろん音楽だけじゃなくて、電話するときにも使える。音声データをリアルタイムで即座に超音波と微弱電流へと変換し、タイムラグなしで共感覚を引き起こせるんだ」

俺は音楽を停止して田所に電話をかけてみる。

「あー、もしもし。聞こえる？」

「《あー、聞こえるぞ。なるほどな。鼓膜を通さないほうがノイズが入らないのか。不思議なもんだな》」

耳から直接聞こえる肉声と頭の中から聞こえる声がダブって、変なりバーブがかかっている。声にエコーがかかっている吸血鬼ごっこができそうだ。意味わからんけど。

「声ダブっててきもいな。この距離で使うものじゃなさそう」

と、自分で言いつつ隣の席の友人と通話するのが奇行であることに気づいて慌てて電話を切った。

「じゃ……じゃあ、そろそろ店出るか」

「そ……そうだな」

田所もアプリ一つで子供のようにはしゃいでしまったことが恥ずかしかったのか、決まり悪そうにそう提案し、俺もそれに答えた。

「じゃあ、ごちそうさま」

久保田が田所と店主に向かって言い、俺たち三人はラーメン屋を後にしたのであった。

田所や久保田と別れてしばらくしたとき、俺のもとに一件のメッセージが届いた。ジェスチャー操作でメッセージを確認する。母親からのメッセージだ。

『瑞希ちゃんが帰ってくるみたいなの。雅哉、悪いんだけど駅まで迎えに行つてあげてくれない？』

瑞希！ 帰ってくるのか。

瑞希というのは俺の姉の名前だ。雅哉というのは俺の名前。

現在はここから少し離れた別の特別経済自治区の会社で働いていたはずだが、休みが取れたのだろうか。夏休みにしては少し早いようにも思うけど、まあ瑞希に会えるなら何でもいいや。

まったく……母上も人使いが荒いぜ。いきなり駅に行けだなんて。でも今回だけは許してやる。瑞希が何か困っているかもしれないし。荷物が多くて身動きがとれないとか、お腹が減りすぎて動けなくなるとか。あるいは駅でナンプアされまくって困ってるかもしれない。なにせ瑞希は美人だからな！ まったく……しょうがねえなあ、瑞希は。仕方無いから迎えに行つてやるぜ。

俺はメッセージを見てからおよそ二秒の間でそれらのことを考え、即座に母親に了解の旨を返信し、近くにいた一人乗り用無人タクシーを拾つて駅に向かい始めた。

タクシーという名前は付いているものの、一人用のものは乗用車とは似ても似つかない見た目をしている。タイヤは二輪で、自転車とは違い並行に並んでいる。乗車部には座席が一つと操作盤が付いている。背もたれは無い。昔はこれと似た乗り物にセグウェイというものがあつたらしいが、実物を見たことは

無い。セグウェイは立ち乗りするものらしいから、それに椅子を取り付けたら無人タクシーのようになるんだらうか。

色はいわゆる Google カラーだ。左の車輪が緑で、右の車輪が青。ボディが黄色で、座席と操作盤が赤だ。正直ダサイとは思っている。

運転は自動制御で、行き先の入力は操作盤か、それと同期させた自分のデバイスで行う。特別経済自治区の外部に出ることはできないが、自治区内であればどこへでも無料で連れて行ってくれる。特別経済自治区内における主要な交通インフラであり、これ無くしてここで暮らす人々の生活は成り立たないであろうというくらい生活に深く浸透している移動手段である。

乗り心地は良好で、カーブ時の挙動も安定している。万が一にも投げ出される心配は無い。道の舗装が行き届いていることも乗り心地の良さに寄与しているのだらう。重量のある車両が激減したことで道路が傷みづらくなったのだ。



俺は無人タクシーに身を任せながらぼんやり街を眺めていた。ガラス張り基調のビルと、広々とした道路。手の行き届いた街路樹からは蝉の鳴き声が聞こえる。スマートポールが道沿いに並び立ち、AR広告を映し出している。

スマートポールとは通信用の電波を飛ばしたり、夜間には街灯としての役割も果たしている柱のことだ。これのおかげで自治区内ではいつでも超高速大容量通信が可能となっている。

平日の昼間ということもあって人通りは少ないが、それでもここに来るまでに何台かの無人タクシーとすれ違っている。人通りが少ないのは自治区の外周部に近づいているせいもあるだろう。鉄道は特別経済自治区同士を結ぶのに使われているため、駅は自治区の端のほうにしか存在しないのだ。線路は自治区の外周部を沿うように敷かれ、そこから分岐して他の特別経済自治区と結ばれている。自治区の中心地にも駅があったほうが便利な気もするけど、街のど真

ん中に外部領域から電車がやってくるというのもなんだか怖い感じがするし、現状のままのほうが良いのかもしれない。

「そういえば駅のほうに来るのは久しぶりだなあ」

夏の真つ青な空を見て気分が良くなっていたのか、思わずそんな独り言を呟いていた。開けた視界と瑞々しい木々を見て開放的な気持ちになっていたのだろう。

前回こつちのほうへ来たのはたしか、春ごろ。田所たちと線路沿いの外周部を歩いて一周しようという無謀な計画を立てたときのことだ。夕方ごろに集まり、田所他、計四人くらいで歩き始めたのだった。最初こそわくわく感があつたものの、次第に集中力も切れてきて、夜通し歩き続けたあとは疲労も相まって全員がおかしなテンションになっていた。わけもなく突然全力疾走を試みたり、四人で童謡を歌い出したり。仕舞いには本来の目的を忘れ、無人タクシーに乗った一人を他の三人で追いかけていたりしていた。そうして疲労を無視し続け、翌日の昼に

なったころ、俺は水分不足や極度の眠気でだいぶ意識が朦朧としていた。その日は春の陽気でとても気温が高かった。着用していたスーツ型デバイスの姿勢制御機構が作動していたのか、疲労のわりにはふらつくこともなく真っ直ぐ立って歩いていたが、それがよくなかった。自分自身の疲労度を見誤り、すでに限界を超えていたのだろう。道沿いの線路を通過した列車から熱風の煽りを受け、俺は熱中症でぶっ倒れた。その後のことはよく覚えていないが、家族から呆れられたことだけは鮮明に覚えている。「三月に熱中症になるなんて、アタ、バカなの？」と。まったく、本当にバカなことをしたもんだ。

そんなことを考えていたら、無人タクシーが停止した。駅前のロータリーに到着したらしい。外周部とはいえ、さすがに駅前ともなるとそれなりに人の往来が増える。別の特別経済自治区との間を行き来する人のほか、自治区内を外周部に沿って移動する人にも鉄道は使われている。自治区内を無人タクシーで

突っ切るよりも鉄道を使ったほうが早いのだ。外周部周辺では無人タクシーを拾いづらいついいう事情もある。

無人タクシーから下車し日陰に入ると、どつと汗が吹き出してきた。外がいかにも暑かったかを今になって実感した。

「水、水……」

俺はそう呟きながら駅構内の売店へと入った。冷房が効いていて気持ちいい。奥の冷蔵庫へと進み、水の入ったペットボトルを一本掴む。そのまま売店から出ようとし、ふと思いついて止まって踵を返し、ペットボトルをもう一本掴んだ。これは瑞希の分だ。瑞希もきつと暑いだろうし、熱中症になりかかっているかもしれない。春に自分が熱中症で倒れたことを思い出す。なんだか急に心配になってきた。瑞希、大丈夫かな？ 自然と歩調が速くなる。

俺は出口のゲートを通過して売店から出た。ピロリン、という音がして自動的に支払いが行われる。早歩きは次第に小走りになり、心拍が上がって気分が高揚

してくる。瑞希を心配する気持ちが薄れ、代わりに早く会いたいという気持ちが強くなってくる。いつの間にかほとんど全力疾走をし始めていた俺は自分の奇行に気づいていない。もちろん、そのとき正面から人が歩いてきていることにも気づいていなかった。

ボスン、というくぐもった音。そして身体に衝撃はあまり訪れない。スーツ型デバイスの衝撃吸収機構は優秀だ。正面から歩いてきた人と肩が接触し、お互いが半身をよじり合うような恰好になる。ぶつかった相手もスーツ型デバイスを着用しており、そこまで気にした風でもない。

すいません、と振り向いて謝りながら、俺は駆け抜けた。そのままろくに前も見ないで下り階段を駆け下りる。当然、と言うべきだろう。俺は階段を踏み外し、前方向に転倒しそうになった。即座にスーツ型デバイスの姿勢制御機構が作動し、前宙の要領で見事に階段を飛び降り、華麗な着地に成功する。しか

し両手に持っていた二本のペットボトルを取り落としそうになり、お手玉のような恰好で俺は前方へと走っていく。

片方を床へ落とし、拾おうとするも、身体がつんのめってペットボトルを踏んづけてしまった。途端にバランスを崩し、二本目のペットボトルも取り落としてしまう。再び姿勢制御機構が作動し、左足が自動的に前方へ出るも、俺はどういうわけか足を引っ込めた。二本目のペットボトルが目に入り、何となく踏んではまいそんな感じがしたのだ。その結果、俺は姿勢制御に失敗した。

びたーん、という音を立てて、俺は派手にすっ転んだ。落としたペットボトルが転がっていく。

「いってえ……」

俺はそう呟きながらペットボトルが転がっていった先を見た。そしてそこに人が立っていることに気がついた。

黒いスニーカーと、そこから覗く白くて細い足首。長めのスカートは純白で、夏の陽射しに照らされたらさぞ映えるだろう。「シャツのボーダー柄はやや太めで、その上に黒っぽいジージャンを袖を通さずに羽織っている。

そうして下のほうから見上げていき、最後に顔を見た。そこにいたのは岸本瑞希。俺の実の姉であり、大好きなお姉ちゃん。やっぱり最高に美しいぜ！

「姉貴……！」

姉との再会を果たした感激に浸りながら俺はそう言った。

一方の瑞希は心底呆れた様子で言った。

「アンタ、バカなの？」

「姿勢制御機構を振り切ってすっ転ぶ人なんて初めて見たわ」

俺が渡したペットボトルを受け取りながら、瑞希は感心した風に言った。嫌味っぽく聞こえないのが不思議だが、間違いなくからかわれている。俺は返す

言葉もなく、手慰みに水を飲んだ。さつき踏んづけたせいでボトルがぐしゃぐしゃだ。

それを見て瑞希も水を飲んだ。こっちのペットボルは綺麗なままだ。落としてはしたが、踏んづけてはいないからな。体を張った甲斐があつたぜ……。

「出張でこっちのほうに来ることになったの。本当は会社がホテルを手配してくれるんだけど、せつかくだから家に帰ろうと思つて」

瑞希はそう言つて、ペットボトルをスーツケース上面のくぼみに置いた。瑞希はスーツケースを掴んでいない。スーツケースは瑞希が歩くペースに合わせて自分で追隨してきているのだ。

「それ、すごいな」

俺はスーツケースを指差しながら言つた。そもそも普段スーツケースを見かけるような場に赴かないのもあるが、こういうスーツケースは初めて見た。上に乗ったらどうなるんだろう？ 楽しそうだなあ。



「……アンタが今何を考えてるかわかる気がするわ」

心を読まれた？ さすが瑞希だ。きつと探偵の才能もあるに違いない。

瑞希が何か言いたそうな顔をしていたが、俺の関心はすでにスーツケースのほうに戻っていた。階段に差し掛かったところで下面から小さなタイヤがたくさん現れ、自力で階段を昇っていく。速度が落ちてしまい、人間の歩きについてこれていないのが難点だろうか。しかしゆっくり階段を昇っていく姿もなんだか愛らしく見えてくる。何より上面に置かれたペットボトルが落ちないでいるのが素晴らしい。

「まあ、これはまだまだだね」

そう言つて瑞希はスーツケースをひよいと持ち上げ、階段を昇つてゆく。俺が持つよ、と声を掛けるも、アンタは転ぶから駄目、と拒まれてしまう。何か言い返したいが言葉が見つからない。そうこうしているうちに瑞希は階段を昇り終えてしまった。

「ほら、行くよ」

階段の上から瑞希の声が聞こえて、俺は慌てて階段を昇りきる。

「俺、迎えに来る必要あった？」

俺は前を歩く瑞希に向けてそう話しかける。バタバタして、迷惑かけて、何の手助けもできていない。荷物持ちくらいしようと思ってたのにスニーカースくん一人で歩き出しちゃうし。

——でも、

「うん。迎えに来てくれて、ありがとう」

振り返って微笑む瑞希が最高に可愛かったから、なんだか全てがどうでもよくなってしまったのだった。

## 第二章

それから三日後、俺は田所の家へと遊びに来ていた。本来は久保田を含めた三人で出かける予定だったのだが、久保田に急用が入ったのだ。二人で出かけるのはなんか違うよなという話になり、また、外があまりにも暑すぎたため、成り行きで田所の家へとやつてくることになったのだ。夏休みを迎えて暇を持って余している俺たちには、出かけずに家に帰るという選択肢は初めから無かったのだ。

「俺はただ自宅に帰ってきただけだけどな」

田所はそう言つてグラスに注いだ麦茶を一気に飲み干した。まさかこいつも心が読めるのか？

田所の家は大学からほど近いところにあり、これまでも何度か遊びに来たことがある。

部屋の中をうろうろしていた俺は、ようやく冷房の直風が浴びられるポイントを発見し、そこで仁王立ちする。全身で浴びる冷風。今、まさに夏を感じている……！

「いや、鬱陶しいから座つてろよ……」

田所は小さなテーブルの上に俺の分のグラスを用意しながら言った。立ったまままでは届かない位置にあるグラス。まさか、これは俺を冷房の前からどかさうとする巧妙な罠か？ 並々と注がれた冷たい麦茶に視線が奪われる。だが、負けるもんか！

「別に要らないならいいけど」

田所が呆れ顔で言う。

要ります！ どきます！ 座ります！

俺は流れるような重心移動で床に座り込み、取り上げられそうになるグラスを両手で死守した。グラスが冷たくて気持ちいい。

「ほんつと、俺たち暇だよな」

そんな俺を見て、田所が笑いながら言った。

「夏休みらしくていいだろ。こういうほうが」

俺は答えて言った。そして、夏休みというワードから一つの話題を思いつく。

「夏休みと言えば、お前、帰省するの？」

ここは田所の下宿先であって、実家は少し離れたところにあつたはずだ。

「ああ、来週から帰る予定なんだ。だから帰る前に今日出かけようと思つてたんだが」

「実家ってどこにあるんだっけ？ 確か外部領域の……」

俺は声を潜めて言った。外部領域というのは特別経済自治区の外側という意味だが、あまり良いイメージは無い。詳しくは知らないが、なんとなく危ないところ、というイメージを持っている。

「そんなタブーみたいな言い方すんなよ。俺の実家があるのは境界領域だからたぶん岸本が想像しているような外部領域とは全然違うと思うぞ」

「いや、ごめん……」

人の実家があるところを悪く思うなんて、さすがに無神経すぎた。田所はいってことよ、とでも言う感じに手をひらひら振ってみせた。きつとこういう反応をされることにも慣れっこなのだろう。

「そもそも岸本だって外部領域に出たことが無いわけじゃないだろ。修学旅行とか、どこ行つたんだよ？」

旅行か。たしかに観光地はたいていどの特別経済自治区にも属していないな。しかし観光地の街並みはいつも人の手が加えられて綺麗に保たれているし、街としてひとまとまりの共同体であるという意味では特別経済自治区と大差無いとも言える。

「たしかに観光地も外部領域っちゃあ外部領域なのか」

「まあ例外中の例外だけだな」

田所はそう付け足す。

「境界領域ってどんなところなんだ？」

俺は田所に聞いた。境界領域というのは自治区外周部のすぐ外側の一帯のことだ。外部領域の中で最も特別経済自治区に距離が近い地域とも言える。

「うーん、場所によるが、住宅地だったり、何か大きめの工場があったり、観光地化を目指しているところがあったり。まあ、いろいろじゃないか？」

田所が答えになっていないようなことを言う。

「やっぱ行ってみないとわかんないのかなあ」

俺はぼんやりとしながらそう呟いた。

「じゃあ旅行しようぜ。境界領域に」

田所が言った。

なるほど！ それはいい考えだ。

「いいね！ 行こう。今日出掛けられなかったのもあるし、久保田も誘ってさ」  
俺は勢い込んで答えた。

そこからの話は早かった。とりあえず暑いから北へ行こう、という単純な発想から、目的地は特別経済自治区北側の境界領域にある避暑地に決まった。日程は田所の帰省の直前にということと今週末に一泊二日。急な予定ではあるが、こういうことができるのが大学生の強みだ。久保田と連絡をとると、すぐにオーケーという返事が届く。その間に田所が宿を調べ上げ、予約をしようとしてくれる。

こうも全てがトントン拍子に進んでいくと気持ちいいぜ。空っぽな夏休みが急に充実してくる感じがある。楽しみだなあ。

「よっしゃ、予約完了！ あとは出かけるだけだな」

田所もかなりテンションが上がっているみたいだ。やっぱこれだよな、夏休みってのは！



それからひとしきりはしゃぎ倒し、喋り尽くし、夕飯を食べに出掛け、そうしてそこで田所と別れた。とても充実した一日だ。毎日がこんな風だったらなあ。そんなことを思いながら俺は帰途に就いたのだった。

翌日は前日の疲れからか昼過ぎまで惰眠を貪ってしまったが、いやこれも夏休みの楽しみ方の一つかと思ひ直し、今日はゆつくり過ごそうなどと考えてなんとなくごろごろしていたら、カラスが鳴き、気づけば夕暮れになっており、それから程なくして瑞希が仕事から帰ってきた。

「ただいまー。涼しい〜」

瑞希はそれだけ言つて、自室へと向かっていった。

俺はようやくリビングのソファから身を起こした。とりあえずネットニュースでも見るか。スマートグラスを操作して、ARモニターを表示する。すると部屋に大きめのVR画面が浮かび上がった。

適当にスクロールしながら記事を流し読みしていく。

・ ついに捕えたか？ 新素粒子を発見したと研究機関が報告。  
・ 海底ケーブルの老朽化が問題に。五年以内に大規模な通信障害が発生する可能性も。

・ Apple 新製品は来月発表とリーカーが予測。

・ え、これも体に悪い？ 知っているようで知らない健康に悪影響を及ぼす食品十選。

「ん？」

その中で一つの記事が目止まる。

・ 中国地方にも『新政府』を名乗る集団が。政府は出動隊の派遣を検討中。

外部領域での話だ。少し前から、九州地方で『新政府』を名乗る集団が活動するようになった。これまでも外部領域で自主自治を訴える集団が現れることはあったが、今回のものは規模が大きいようだ。記事には外国の工作員が裏で手を引いている可能性を示唆する記述もある。詳しいことは何も知らないが、こういうニュースを目にするとやっぱり外部領域は怖いところなのかなというイメージが植え付けられていく。

そのとき着替えを済ませた瑞希がリビングに入ってきた。

「姉貴、これ大丈夫なの？ 向こうに帰るとき外部領域通るんだよね？」

俺は目の前に浮かぶネット記事を指差した。今俺から見えているTV画面は家族で共有されているため、瑞希からも同じ画面が見えているのだ。

「ふーん、ついに本州まで来たのね。まあ私が帰るのは全然違う方面だからほとんど関係無いと思うわ」

瑞希は記事を読みながら言った。

「今度境界領域へ旅行に行く予定なんだけど大丈夫かな？」

「へえ、旅行なんて珍しいわね。でもそれは心配しすぎよ。九州までどれだけ離れてると思ってるのよ」

まあ確かに心配しすぎか。そもそも旅行先は外部領域とは言っても境界領域だしな。だとするとやっぱり俺よりもお姉ちゃんのほうが危険なんじゃないのか？ 方面が違うとはいえ外部領域を突っ切るわけだし。せめて駅まで見送りに行くくらいはしておきたい。

「姉貴が出発するのって金曜だったよね？俺も同じ時間に家出るよ。旅行行くの、その日なんだ」

「あらそう。じゃあそうしましょうかね」

俺は瑞希と出発の時間を決めた。旅行出発の時間をまだ決めていなくてよかつた。田所に連絡しておこう。集合場所も決めておかなくちゃ。田所や久保田とは

最寄り駅が違うからな。あーなんかわくわくしてきた。旅行つていいなあ。まだ出掛けてないけど。

俺は自室に戻り、田所たちと連絡をとることにした。

それから旅行当日まではあつという間だった。荷造りが終わってもなんとなくそわそわした気分が続き、時間が流れるのも早かったような気がする。そわそわすぎて昨晩はなかなか寝つけなかったぜ。運動会前日の小学生かよ。

「アンタ眠そうね。また熱中症とかいつて倒れないでね」

瑞希は俺の顔を覗き込むようにして言った。

「だ、大丈夫だよ。ちゃんと眠れたし」

俺は慌てて答えた。

俺たちは駅に来ていた。この駅は特別経済自治区の東側の外周部に位置している。瑞希は南東にある特別経済自治区へ向かうため、外周部を時計回りに走

る列車に乗る必要があった。一方、俺は北部の境界領域へ向かうため、逆回りの列車に乗ることになる。田所や久保田は最寄り駅がここよりもやや北側に位置しているため、合流は電車の中で行うことになっていた。

「じゃあ、そろそろ行くわね。次に帰ってくるのは年末かしらね」

瑞希はそう言ってホームに向かおうとした。

「ちよ、ちよつと待つて」

俺は咄嗟に瑞希を呼び止めた。あまりに名残惜しげもなく立ち去ろうとするものだから、反射的に声が出たのだ。

「なあに？」

瑞希は振り返ってそう聞いた。

しかし特に話すことを決めていたわけではない。でも、そんな急にいなくなったら寂しいじゃんかよ。

俺は考えがまとまらないまま口を開く。

「姉貴、元気だな。何かあったら俺がすぐ駆けつけるから。姉貴のピンチには俺が必ず助けに行くから。だから、だから気をつけて。年末まで、バイバイ」

そう言い終わると、瑞希が驚いたような表情をしていることに気がついた。さすがに支離滅裂すぎたか。それになんだこの台詞は。恥ずかしすぎる。いっそ無かったことにしてくれないだろうか。こんな言葉を聞かされたら驚くのも当然だ。と、そう思っていたのだが。

「アンタ、なんで泣いてんのよ……」

瑞希が驚いているのは俺の言葉に対してではなかった。俺は目元に手をやり、手にべつとりと涙がついているのを目視し、そうしてはじめて自分が泣いていることに気がついた。

「恥ずかしいからやめて。そんなに寂しがられるとは思ってなかったわ。こっちまで寂しい気がしてくるじゃない」

そんなふうに言う瑞希は、しかしどこか嬉しそうでもあった。

「じゃ、じゃあ私はもう行くから。アンタも遅れちゃうでしょ？ 気をつけて  
いつてらっしゃい」

俺が気恥ずかしさで悶えているうちに、瑞希はそう言つて今度こそホームへ向  
かつて行つた。

遠ざかつていく瑞希の背中をぼんやりと眺めていた俺は、スマートグラスを外  
して手の甲で涙をぐしぐしと拭つた。それからスマートグラスをかけ直すと、画  
面の端に表示されている現在時刻が目に入った。一瞬の思考の空白。そして直後  
に訪れるやつちまつた感。

「やつべえ！」

電車の発車時刻が目前に迫っていた。

俺は構内を全力で走り、階段を駆け上がった。こんなことが最近もあつたな、  
と思ひ出し、人にぶつからないことと転倒しないことを心がける。どちらも注意  
していれば避けられることだ。急いではいるが今の俺はきわめて冷静だぜ！



階段を昇りきると、ホームに電車が止まっているのが見えた。電車の発車ベルが鳴り響いている。俺は階段を駆け上がった勢いそのままに電車へと直進し、ギリギリのところでもなんとか車内に身を滑り込ませることに成功した。

そのまま空いている座席に腰を下ろし、呼吸を整える。本当に危なかった。まったく、なんだか一気に疲れてしまったよ……。

電車に間に合ったことによる安心感、走ったことによる疲労感。そういったものに昨晚眠りが浅かったことが相まって、俺は急激な眠気に襲われた。

その前に田所たちに連絡しないと……。

電車の中で合流するため、俺は自分の乗った号車を田所たちに伝えた。返信を確認する余力もなく、俺はそのままうとうと眠りに落ちていった。田所たちがやってきたら起こしてもらおう。そんなふうに考えていた。

俺が目覚めたとき、電車は停車していた。周囲に田所たちの姿は無い。ここはどこだ？

駅名を調べようとしたとき、田所から連絡が入っていることに気づいた。

『俺と久保田は言われた号車に乗ってるんだが、今どこにいるんだ？』

むむ、何かおかしい。俺は自分の乗っている号車を再度確認するが、間違いは無い。ということは、乗る電車を間違えたのか？

そして現在地を調べた俺は愕然とした。俺は今、北東方面の外部領域に來ているのである。

慌てて電車から飛び降り、逆方面の電車に乗ろうとするが、そこではじめて電車が止まっていることに気づいた。止まっているというのは、運転見合わせということだ。

「なんでこんなときに……」

俺はなぜこんなことになってしまったのかを振り返った。幸い電車でぐつすり眠ったおかげで頭は冴え渡っていた。発生した事態はおおよそ次のようなことであった。

まず俺は乗る電車を間違えた。外周部を周回する電車に乗ったつもりが、実際には北東方面行きの直通電車に乗っていた。恐らく俺が電車に駆け込んだとき、同じホームにもう一台列車が止まっていたのだろう。思い返せば確かにそんな気がする。そして俺が乗った電車は北東にある特別経済自治区へ向かう途中、何らかの事情で運転が見合わせになった（後のアナウンスで、運転見合わせの原因が外部領域の踏切周辺におけるトラブルであるとわかった）。

なんてことだ。俺はまず田所たちに事情説明と謝罪の連絡を送った。きつと復旧には数時間かかる。申し訳無いが二人には先に行っていてもらおう。

それから俺の一人反省会が始まった。駆け込み乗車をするときはどうして自分が冷静であると思いついていたのだろう。しっかりと確認してから乗るべき

だった。それに今思えば電車に一本くらい乗り遅れることは大した問題ではなかったのだ。田所たちに連絡して一本電車を見送ってもらえればそれで済む話だった。もちろんそれでも詫びなければならなかったではあろうが、現状に比べれば何十倍もマシだった。

そんなことを思いながらホームをうろうろしていた俺は、ようやく外の景色を見た。

まず灰色の無機質なビルが十本ほど建っているのが目に入った。そしてそのいくつかには色あせた広告が取り付けてあった。スマートグラスをずらして直に見てみると、それがAR広告ではなく物理的に壁に取り付けられている広告であるとわかった。

なんだか面白くなってきて俺は駅の出口に向かった。先ほどまでのネガティブな感情はすでにほとんど消え去っていた。

駅の内装は比較的綺麗で、とても外部領域にあるものとは思えなかった。そういうえば修学旅行へ行つたときに見た駅もこんな感じだったかもしれない。

俺は駅の外に出た。駅前は大きく開けており、それ自体は特別経済自治区内の駅前と似ていた。地面がタイル張りなのも似ているし、駅前にロータリーがあるのも似ているし、近くに謎のオブジェが置いてあるのも似ていた。しかしそのそれぞれが少しずつ違っていて違和感を生み出し、全体としては完全に別物の世界が広がっていた。そもそもロータリーに無人タクシーではなくバスが停まっているというのが違和感でしかない。よく見ると周囲の街灯はスマートポールではなくただのライトだし、周囲に見える広告のいずれもがARではないというのが新鮮だ。個人に合わせて最適化ができないせいで、普段全然目しないジャンルの広告が散見されるのも面白い。

俺は目の前の大通りを渡って街の奥に歩みを進めた。

大きなビルの裏を覗くと、そこは薄暗い路地になっていた。好奇心に負けて俺はその路地へ入ってゆく。

「こ、これは……！ ロストテクノロジーか？」

進んだ先で路地をふさぐように停めてあったのは一台のバイクであった。話で聞いたことはあったが実物を見るのは初めてだ。特別経済自治区内では四輪車こそまだ使われているものの、一人乗りの二輪車というのは無人タクシーに完全に取って代わられている。

「こ、これが排気口……！」

そして特別経済自治区内にはガソリンで動く乗り物は存在しない。当然排気口も見たことが無い。驚きの連続で何度も声が出てしまう。こんなものが本当にまだ実在したのか。

そうして車体を観察しているうちにさらなる誘惑に頭が支配される。

一回跨がってみたい……跨がってみたいくない？

俺は周囲を見渡す。薄暗い路地、人影は無い。

そつと足を上げ、座席を跨ごうとして。あれ、意外と高いな。いったん体勢を立て直して、もう一度。今度はきちんと乗ることができた。足をかけるのは……ここかな？ どうやって操縦するんだろう。いやもちろんエンジンかかってないから発進はしないけど。人の物だしさすがに下手に弄つたらまずいよな。でもせつかくなら弄れるところは弄つてみたいし……。

そんなふうにもたもたしていると――

「何やってんのよ。泥棒」

背後から声を掛けられて俺はすくみ上がる。体がビクツと震えたのがきつと傍目にもわかっただろう。それくらいびっくりした。

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには中学生くらいの見た目の女の子が立っていた。

状況は最悪だった。俺はバイクに跨がったままで、どう見ても言い逃れはできない。目の前の女の子はまだ小さいし、きつと持ち主は他にいるのだろう。強面の男の人が出てきてタコ殴りにされるかもしれない。なにせここは外部領域だ。警察だってまともに機能してないだろう。何をされても文句は言えない。スーツ型デバイスの自衛機構があるからある程度は耐えられるかもしれないが、自衛機構は顔にはついていないからな。顔を殴られると困るな。

「ご、ごめんなさい、こんなの初めて見たから。でも顔だけは、顔だけは！ 顔面セーフ！」

俺は即座にバイクから降りて頭を下げて叫んだ。

「何言ってるの、あんた。まあいいわ、バイバイ」

女の子はそう言うと、バイクのエンジンをかけて颯爽とバイクに跨がる。明らかに背丈と車高がアンバランスだけど、器用にやるもんだなあと思った。女の子はヘルメットをかぶってそのまま走り出そうとする。



あれ？ 強面のお兄さんは？

「ま、待ってよ」

慌てて声を掛けた。無視して走り去ってしまうかとも思ったが、意外にも女の子は振り返ってくれた。

「何よ？」

「俺、外部領域に来るの初めてで。それでバイクなんて見たことなく。あと電車が止まって困ってて。あとあと……」

ぐうう、と腹が鳴る。

「どこか昼ごはん食べられるところ知らない？」

女の子は啞然とした表情になったあと、一瞬の思案を経てまた元の表情に戻り、

「なら私の昼ごはん奢りなさい」

と言った。

泥棒認定をされた後だったこともあり、きっと高い店に連れて行かれるのだらうと覚悟していたのだが、意外にも連れてこられたのはコンビニだった。

女の子はコンビニへ入ると迷いなく奥の棚を指していき、一つの弁当をとって俺に無言で突きつけた。デミグラスハンバーグ弁当。

「飲み物とかは要らないの？」

と俺が言うと、女の子ははっとした表情となって冷蔵庫からドリンクを持ってきた。その間に俺も自分の弁当を選んで、お茶を一本棚からとる。さらになんともなく目についたプリンをカゴに入れた。

「……………！」

それを見た女の子が慌ててデザートコーナーへ行つてエクレアを掴んで帰ってくる。俺に対して遠慮があつたのだろうか？ まあいいや。そう思い、俺はそのまま店から出ようとした。

「ちよつと待ちなさい！」

女の子に背中を掴まれ強引に引き止められる。それから小声でこう付け足した。

「あんだ、やけに気前がいいと思つたら初めから万引きするつもりだったのね」

そう言われて俺はようやく事態に気がつく。なるほど、レジで会計を済ませなければならぬのか。危なかつたぜ……。

俺はレジに行つてきちんと会計を済ませ、そして今度こそ正しく外に出た。女の子がバイクを押して歩いていくのを見て、俺はついていった。少し歩いた先には木陰があつた。女の子がそこに腰を下ろしたのを見て、俺も近くに座つた。先ほど買った弁当を手渡すと、女の子はいそいそと弁当を開け始めた。

「しかしそんなんで良かったのか？ てつきりもつと高い飯を奢らされるのかと思つてたよ」

俺がそう言うのと、

「ん？ 何言ってるのよ？ これがあのコンビニで一番高い弁当よ。他にどんな食べ物があるのよ？」

女の子がそう返し、

「えっと、外部領域には飲食店は無いの？ 蕎麦屋とか寿司屋とか」

俺が再び聞き返すと、弁当を開けていた女の子の手が止まった。

「うわあああ！ ミスったあああ！」

女の子は頭を抱えて叫び出した。

「違う！ 違うのよ！ いつもはせいぜいおにぎりしか買えないからこの弁当が最高級の食べ物だと思ってたの！ うわあ、私の馬鹿！ こんなチャンス二度と無いかもしれないのに」

俺はそんな女の子の豹変ぶりに驚いていた。もしかしてこの子めちゃくちや抜けてる？ おつちよこちよい？ 考えなしに動き出しちゃうタイプ？

その全てが自分にも当てはまる事柄であることには気づいていない。

「ま、まあ買っちゃったものは仕方無いし、今日はこれで勘弁してあげるわ。

それにこの弁当が最高級のコンビニ弁当であることは変わらないからね。それにエクレアもあるし、えへへ……」

気を取り直すのが早い人だなあ、と思いながら俺も自分の弁当を食べ始めた。気を取り直すのが早いという性格も自分に当てはまる事柄なのだが、そのことにはやっぱり気づいていない。

「ふーん、それでこんなところに一人でやってきたってわけね」

デザートプリンを食べながら俺はここにやってきた経緯を話した。女の子は香織という名前らしい。今はエクレアを頬張っている。

「それでまだ電車は動いていないみたいなんだ」

俺は運行状況を調べながら言った。駅前スマートポールが無いのを見たときは電波が飛んでいないんじゃないかと懸念していたのだが、意外にも外部領域でもネットは使えた。通信規格は一世代前のものだったけれど。

「じゃあ、私がこのあたりを案内してあげるわ」

香織はエクレアの最後の一口を飲み込むと、立ち上がってそう言った。

「いいのか？」

俺は突然の提案に驚いて聞き返す。

「あんたが外部領域を見てみたいって言ったんじゃない」

香織はすでにエンジンのかかったバイクに乗って待機している。準備早いなあ。というか俺はどうすればいいんだ？ 走るの？ 無理だよな？

「何してんの？ 早く乗って」

香織はバイクの後ろを指差す。

「はい、ごめん」

俺は慌てて香織のすぐ後ろに跨がる。香織の背中が近い。ど、どこに掴まれ  
ばいいんだ……？

「じゃあ行くわよ。振り落とされないでね。私運転上手くないから」

香織はそんな不穏な言葉を言い放つと、バイクを発進させた。俺は早速振り  
落とされそうになるが、姿勢制御機構が作動してなんとか体勢を立て直した。  
適当に掴まれそうなところを掴み、なんとか安定して乗れる位置を見つける。  
さすがに見た目女子中学生の香織の背中にしがみつくわけにもいかなかったの  
だ。

一度安定してしまえば乗り心地は良かった。ヘルメットをかぶっているから  
表情はわからないけれど、運転している香織はとて大人びて見えた。本当は  
何歳なんだろう。中学生だと免許とれないよね？

俺は香織に何か話しかけようとしたが、聞こえない、と言われてしまった。実際、エンジン音や風を切る音がうるさくてまともに会話することはできなさそうだったので、俺は黙って周りの景色を観察することにした。

周囲は全体的にごちゃごちゃしている印象を受けた。矛盾しているようだが、それでいてどこか殺風景な感じもした。なんというか、街の景観に厚みが無い。道路のアスファルトにはヒビが入っているところもあつたが、想像していたよりはずっと整備されていた。外部領域にはもつと荒廃した土地が広がっているものだと思っていた。

建っているビルはデザインがなんとなく古い感じはするものの、機能面で何か劣っているような印象は受けなかった。特別経済自治区の中でも成立が古い自治区のビルは老朽化が進んでいると聞くと、それと同等ぐらいの水準はあるんじゃないだろうか。

「都市部はこんな感じ。どう？ 意外とちゃんとしてるでしょ」



大きな川にかかる橋の前で香織はバイクを停めた。外部領域に偏見を持っていた内心を見透かされたようで、俺はなんだか決まり悪い気持ちになった。

「ここから先は住宅地だから引き返すわ。駅のほうに戻るわね」  
香織はそう言うのと、再びバイクを走らせた。

駅前についたのは二時頃だった。正味一時間ほど街案内をしてもらった計算になる。

「着いたわよ」

香織は駅前近くの道路沿いにバイクを停めた。

「ありがとう。こんなにしてもらっちゃって、悪いな」

俺はバイクから降りながら言った。明らかに昼飯代に釣り合っていないし、そもそもあれは俺が無断でバイクに触っていたことに対する謝罪だ。

「何かまた機会があれば、今度はもつとまともな飯奢るよ」

俺はそう言った。

「機会があればって、こんな僻地にまた来ることなんて無いでしょうが」

香織はそう返した。まあ確かにそうなんだけど。

「じゃ、じゃあ一応連絡先聞いておこうかな。連絡取ればまた会えるかもしれないし」

「一応とか、かもしれないとか、全然会う気無いでしょ？」

香織はそう言いながらスマホを取り出した。前時代的な非ウェアラブル端末だ。外部領域ではこれが一般的らしい。

「まあ、とにかく、今日はありがとう。じゃあな」

連絡先の交換を終えた俺は香織に手を振って歩き出す。あらためて挨拶しようと思うと何と言っていないかわからず、ぎこちない挨拶になってしまった。それでもとりあえず手を振っておけば別れの挨拶としては意味をなすだろうと思い、適当に手を振ってごまかした。ボディランゲージ最強！

駅に入ると、電車の運転が再開していることがわかった。夕方には田所たちと合流できるな。

俺はホームへ上がり、やってきた電車に乗車した。乗る前に行き先をこれでもかというほど入念に確かめたことは言うまでも無い。

## 第三章

香織は岸本を見送ると、再びバイクを走らせた。

変な人だったな、と香織は思った。いつものように路地裏にバイクを停めて近隣の建物でガラクタを漁っていたら、見知らぬ男がバイクを物色していたのだ。

自分の見た目が人からナメられやすいことを知っていた香織は、あえて強気な口調で相手に声を掛けた。カギは自分が持っているし、こんな短時間でピッキングができるとも思えなかったから、バイクを乗り逃げされる心配は無いかと考えた。もし相手が殴りかかってきたらいったんバイクを置き去りにして逃げよう、と香織は心の内で思った。

しかし振り返った相手を見て、そんな心配は杞憂だったということがすぐにわかった。相手は見るからにおどおどしていて、襲いかかってくるような気配が微塵も感じられなかったからである。そういう態度や、頭から足まで至る所に何

かデバイスを身につけていたことから、相手は企業領側の人間だということがすぐにわかった。

さつさとバイクを取り返してここから立ち去ろう、と香織は思った。そしてエンジンをかけ、バイクに跨がったあたりで現状がまたと無い好機であることに思い至った。

相手は企業領の人間だからきつと金を持っている。見るからに押しに弱そうだし、バイクを物色していたことをかなり引け目に思っている様子だった。カモだ。何を要求してやろうか。

「ま、待つてよ」

そんなことを考えていると、あろうことか相手のほうから声を掛けてきた。香織は内心からこみ上げてくる笑みを噛み殺し、あくまで毅然とした態度で振り返る。

すると相手は早口で事情説明のようなことを話し出し、そして腹を鳴らして言ったのだ。

「どこか昼ごはん食べられるところ知らない？」

その能天気すぎる発言に一瞬面食らってしまったが、すぐに平静さを取り戻し、このカモ野郎には昼飯を奢らせよう、と思ったのだった。

昼飯を食べながら話す中で、香織は企業領の人間に対する認識を少しずつあらためていた。企業領の人間はみな高慢で、自分本位で、外部領域になんて全く関心を持っていないのだと思っていた。だがこの岸本というらしい男は外部領域に強い関心を持っているようだった。

「特別経済自治区にいるとき」

岸本は言った。企業領の人間は自分の住む地域のことを長ったらしい名前と呼ぶ。

「自分の暮らしている世界が全てであるかのように錯覚してしまうんだ。ここに来るまで外部領域は特別経済自治区同士の間にある通過点のように思っていたんだと思う」

岸本は懺悔をするかのような声でそう続けた。

「別にあんたに限ったことじゃないわ」

香織は慰めるように言った。そして言った直後に、どうして自分はバイク泥棒を慰めているのだろう、と思った。

岸本が外部領域にやってくることになった経緯を話しているのを聞いていると、香織はなんだか街案内をしたい気分になってきた。自分に何のメリットも無いことをするなんて普段ならありえないことだった。どうしてそんな気分になってしまったのか、よくわからなかった。こんなふうに人とゆつくり話すのが久しぶりだったからかもしれない。

香織はバイクを走らせながら先ほどのことを思い返していた。

「ここはさつきあいつと走った道ね」

今日のご馳走にありつけたので、ガラクタ漁りを取りやめてさつきと帰ることにしたのだ。住宅地へ向けてまっすぐ走っていく。

「そういえば昔はよくお兄ちゃんに乗せてもらってたなあ」

ぼんやりと運転していたら、ふいに昔のことを思い出した。香織は物思いに耽る。

香織には兄がいた。兄は良太という名前だった。良太は決断力があつて、どんなことにも物怖じしない頼れる兄であった。

良太は小さい頃からよく香織と遊んでくれた。子供の少ないこの外部領域では他に遊べる人はいなかった。



ことには大きな意義があった。

良太はやがて香織を後ろに乗せてくれるようになった。時には香織を一人で乗せ、運転を教えてくださいられることもあった。香織は兄と過ごすそんな時間がとても好きだったのであった。

「そっか」

香織は呟いた。岸本をバイクに乗せたいと感じたのは無意識のうちに兄のことを思い出していたからだだったのかもしれない、と香織は思った。

香織は大きな川の前まで戻ってきた。先ほど岸本と来たときには引き返した地点だ。今度は引き返さず、先へ進んでゆく。

住宅地にはたくさんの家が並んでいた。しかしその大半はとても住宅と言えるようなものではなくなっていた。窓ガラスが割れ、エアコンの配管には穴が開き、周囲には雑草が生い茂っていた。駅周辺こそ栄えているものの、これが

外部領域の実情なのであった。香織が岸本といたときに住宅地へ入らなかつたのは、この風景を見せることがなんとなく憚られたからであつた。自分の暮らす街を良く思ってもらいたいと願うのは、外部領域にいても変わらないことなのだ。

香織は廃住宅が並ぶ一画の、比較的状态の良い住居の側にバイクを停めた。壁はくすんでいたし屋根の塗装も剥げかかつていたが、しかしきちんと雨風がしのげるといふ意味においては住居として完全なものと言えた。ここが香織の暮らす家だつた。香織のようにこの住宅地で暮らしている者は一定数いる。並び立つ住宅の中に状態の良い家があつたらそこには誰かしらが住んでいることが多い。それが自分の家なのか勝手に占拠している家なのかはわからないが。

香織は家が上がつた。電気は、使える。水も、出る。

日本政府は東京だけを企業領と同水準の都市に仕立て上げているため、「東京政府」などと揶揄されることもある。そういった国民の声を踏まえ、「日本」政府であることをアピールするために、外部領域のライフラインはまだ使える状態

に保たれているのだ。人口減少で電気や水が余るようになった現代、余剰分は優先的に外部領域へと回され、極貧層の暮らしを支えているのである。

香織は部屋の隅に腰を下ろした。作業机が視界に入る。上にはガラクタや廃品が積んであった。ガラクタ漁りで得た拾得物だ。これらを磨いたりバラしたりして売れそうなものを都市部へ持つていくことで、香織は生計を立てているのであった。香織はホコリを被つて文字盤の見えなくなった時計を手を取つて磨き始めた。これは都市部近くの空き家で見つけたものだ。空き家には人が住んでいることがある。誰も管理していないから勝手に住み始めるのは容易だし、都市部に近いほうが便利だからだ。外部領域で暮らし始めたばかりの人が住むケースが多い。だが、外部領域で長く暮らしている人たちは決してそこへ住もうとは思わない。香織のようにたとえ不便でも都市部から離れた住宅地に住むのだ。なぜなら都市部の近くは危険だからだ。

他所から流れ着いて外部領域に住み始める人の多くは、企業領や境界領域で落ちこぼれた人々だ。しかし彼らは外部領域の水準で見れば十分金を持っている人たちなのだ。彼ら自身にはその自覚はなく、また外部領域で必須の「自分の身は自分で守る」という心構えを持っている者はほとんどいない。要するに、彼らはカモなのだ。結果、都市部周辺ではしばしば「狩り」が行われるようになった。留守の間を狙って金目のものを盗んだり、人のほうを襲って身ぐるみ剥ぎとったりするのだ。そうやって襲われた人々は自分で他所へ逃げ出したり、あるいは誰かにどこかへ連れて行かれたりするのであった。連れて行かれた人がどうなっているのかは香織も詳しく知らなかった。

時計の文字盤を拭き取ると、針が動いているのがわかった。置き去りにされてからまだそれほど月日が経っていないかと思ったのかもしれない。持ち主の前入居者はどうなったのだろうか、と思いを巡らしそうになったが思いとどまる。明らかにしばらく使われていなかったとはいえ、自分もその人から時計を盗んでいるのだ。

外部領域で暮らしていくには心を殺して自分の生活を成り立たせることに集中していなければならない。

香織はスマホを取り出して時刻を確認した。電波は繋がっていない。回線契約をしていないからだ。都市部では公共のWi-Fiが使えるので、回線契約をしていなくてもスマホの使い道はある。

「時間もほとんどズレてないわね」

磨いて綺麗になった時計は、ほとんど現在時刻を指し示していた。

「明日の朝売りに行こうつと」

香織は時計を脇に置き、次のガラクタを磨き始めた。

俺が宿屋にたどり着いたのは五時を少し過ぎた頃だった。田所や久保田はまだ到着していなかったが、じきにここへやってくるはずだった。

「宿に着いたぞ、っと」

俺は田所たちにメッセージを送り、辺りを見渡した。

まず、遠くに山が見えた。左右にも山々が連なり、一つの山脈を形成していた。そしてその山脈は夕陽に照らされて山肌を赤く染めていた。

近くは木々に覆われていた。セミがしゃわしゃわと鳴いており、時折離れたところから鳥の鳴き声が聞こえた。さらに耳を澄ませると、水のせせらぎが聞こえるような気がした。近くを小川が流れているのかもしれないなかった。

「同じく外部領域とは言うけど、こんなにも違うんだなあ」

俺は香織と会った街のことを思い出す。あそこはこのように自然に囲まれているわけではなかった。建物がまばらになっているところこそあったが、外部領域にもあんなふうにはビルがバンバン建っているのだということが新鮮な驚きだった。あれは紛れもなく都市だった。だが一方で違和感もあった。俺が持っている都市のイメージとズレていたからだ。特別経済自治区の街並みを見慣れているせ

いだろう。外国の都市部の写真を見せられたときに感じるものに近いかもしれない。

そんなふうに考え事をしていると、

「お待たせ」

久保田の声が聞こえ、

「ういーつす」

やや遅れて田所がやってきた。

「二人とも、今日はマジでごめん」

俺はまず二人に頭を下げた。

「いいって、いいって。まあとりあえず宿に入ろうぜ」

田所はさして気にした風もなく、宿へ上がっていった。何事もなかったかのようにチェックインの手続きを済ませ、鍵を受け取って戻ってきた。

もしかして田所は滅茶苦茶に怒っているんじゃないだろうか。平然とした様子が逆に怖い。怒りを押し殺しているようにも見える。考えてみればそりやそうだ。俺が境界領域を見てみたいと言つて行くことになった旅行に、俺本人がいなかったのだ。宿の手配は田所に一任してしまつていたし、久保田は俺たちに日程の都合を合わせてくれていた。俺、とんでもない重罪を犯してしまつたんじゃない？

田所と久保田の歩く半歩後ろからそつと二人の様子を窺う。田所は部屋の鍵をゆらゆらさせながら廊下をまっすぐ歩いていく。久保田は田所の隣に並んで歩いていくが、二人は終始無言だった。背負っている荷物がガサガサと立てる音だけが續いていく。

やがて二人は部屋の前に立ち止まつた。ここが今晚泊まる部屋のようだ。二人が部屋に入つていくのを見て俺も後に続く。そして俺が部屋に荷物を下ろしたあたりで田所から声が掛かつた。

「なあ、岸本」



振り返ると田所がいつになく真剣な表情をしていた。やはり怒っているのだろう。俺は反射的に正座して田所のほうを向き直る。

「……………」

田所は何も言わずこちらを見ている。近くに久保田も座った。ちらりと久保田の表情も窺うが、感情がよく読み取れない。久保田も何か喋りだす気配は無い。やはりここはあらためて俺から謝罪をしなければ。

「あの、二人とも、今日は本当に申し訳無かった。俺が旅行行きたいって言い出したのに……………」

「……………」

二人はなおも無言だ。

「い、いや、さすがにそんなに怒ってるとは思ってなかったっていうか……………とにかく、ごめん。そ、そうだ。飲み物！ 飲み物何か買ってくるよ。もちろん奢りで。何がいい？」

俺はとつさにそう言った。言葉だけの謝罪よりもそつちのほうがいいと思つたし、何より無言でいられるのが一番辛かった。欲しい飲み物を聞けば何かしら喋らざるを得ないだろう。

「……………ぶっ！」

飲み物を買いに立ち上がりとしていた俺が音の聞こえたほうを向くと、  
「ぶっははははは！ あっはっはっはっはっはっは！」

田所が笑い転げていた。

「くく……………く、く……………」

隣では久保田が忍び笑いを漏らしている。

一瞬どういうことかわからなかったが、次第に理解が追いついてくる。

「おい、お前ら！ やったな？ 趣味が悪いぞ」

俺は二人に怒鳴った。先程までの緊張していた空気が一気に弛緩してくるのを感じた。こいつら、怒ったふりをして俺の反応を楽しんでいやがったんだ。ちきしょう、まんまとやられたぜ。

「すまんすまん。本当は俺だつてやりたくなかったんだ。でも久保田がどうしてもやろうつて言つて聞かなくてな？」

「ええっ！ 僕？ 話が違うだろ」

田所と久保田が三流の悪役のような台詞を吐く。

まったく、何なんだよこいつらは。人の不安な気持ちにつけ込みやがつて。俺がどんなに心配したと思つてんだ……。

しかし、内心では二人にむしろ感謝の念を抱いていた。下手な謝罪をされるよりもこうしてジョークに昇華してもらったほうがお互い後腐れなくすつきりとした気持ちになれる。二人がそこまで考えた上で行動していたのかは知らないが。

「ところで、岸本。俺はコーラで頼む」

「は？」

「飲み物、奢ってくれるんだろ？ 僕はレモンティーで」

前言撤回。俺は二人に微塵も感謝の気持ちなんて抱いてない。

「ぶはーっ！ やっぱ染みるぜ」

田所はコーラを一気に半分くらい飲んで言った。俺は売店に行つて二人のために飲み物を買ってきたのだった。俺も買ってきた自分の分のサイダーを飲んだ。……おいしい。旅行先で飲む炭酸飲料つてなぜかおいしく感じられるよね。

「昼間の話、聞かせてよ」

久保田が言った。久保田はまだレモンティーに口をつけていない。……もしかして要らないのに頼んだの？

「そうだな。寝過ぎした、みたいな話は聞いたけど、詳しい話を聞きたいな。そもそも寝過ぎしたんじゃないかって乗った電車が違ったんだろ？」

田所が重ねてそう聞いた。

「そうなんだよ。朝慌てて電車に飛び乗ったら行き先が違って。でもそのときは気づいてなかったから、そのままぼんやり席に座ってて」

「うんうん」

久保田が相槌を打つ。

「それで乗った号車をお前らに連絡して、なんか滅茶苦茶眠くなってきた。とこのも昨日はあんまり眠れてなくて。でも乗った電車は伝えたし合流できれば目が覚めるかなあと思って」

「うんうん」

「それでうとうととしてるうちに眠ってたみたいで、目が覚めたら全然知らない駅にいたんだ」

「ふーん」

田所は黙ったままニヤニヤとこちらを見ていた。腹立つなあ。

「それで慌てて引き返そうと思ったんだけど、電車が止まっててきあ。本当に困ったんだよ」

「どこまで行つてたんだ？」

久保田が聞いた。俺は今日の昼間に期せずしてたどり着いてしまった駅の名を言つた。

「でもまあ良かったじゃねえか。電車止まってなかったらどこまで行つてたかわかんないぜ？」

田所が言つた。確かにそういう捉え方もできるな。俺は電車が止まってからどれくらい眠つていたんだろう。

「まあ、確かにそうだな。とにかく、俺は駅周辺を散策しながらしばらく時間が経つのを待つて、それからここへ来たつてわけ」

香織と会った話はなんとなく省略した。久保田がなるほど、と相槌を打つ。

「逆に、お前らはその間何してたんだ？ この辺りの観光？」

俺は二人に聞いた。

「ま、その話は後にしようぜ。俺は早く温泉に入りてえ！」

田所は立ち上がって言った。

「そうだな、温泉でも話せるし。のんびりしていると夕飯の時間になっちゃうもんな」

久保田もそう言った。そう言われると俺も早く温泉に入りたいような気持ちになってくる。早く温泉に入りてえ！

そういうわけで、俺たちは雑談を中断して温泉に向かうことにしたのだった。

温泉から上がり、夕食を終えた俺たちは部屋に戻ってきていた。温泉では疲れが癒せた。日々積み重なってきた小さな疲労の数々を一気に洗い落とせたよ

うな感じがした。なんだか体が軽くなったようにさえ感じる。そして夕食は豪華なすき焼きだった。広々とした和室に色とりどりの食材。そして風呂上がりに着た浴衣が趣深さに一役買っていた。絵に描いたような旅行風景だった。

今は部屋に敷かれた布団の上でみんなごろごろしている。修学旅行みたいでわくわくするね！

「いやー、食い過ぎて動けないぜ」

田所が腹をさすりながら言った。仰向けに倒れたまま、本当に動き出す気配が無い。

「ようやく旅行って感じがしてきたなあ。やっぱ旅行と旅館はセットっていうか」

「そもそも岸本は旅館に来るところからしか旅行してないじゃん」

久保田のツツコミが入る。まあ、確かに……。

「そういえば今日岸本がたどり着いたのってこの駅だったっけ？」



久保田が俺に画面を共有する。

「うん、そこだよ。まったく、大変だったんだから……」

「そんなことより、これ。この記事見て。電車が止まったのってなんか『新政府』が関係してるっぽい。まだよくわかんないけど」

そう言つて久保田が一つの記事を見せてきた。

・運転見合わせの原因に『新政府』が関与か。

本日十時頃に発生した踏切トラブルについて目撃者から証言を得た。それによると、今朝方、踏切を大型のトラックが相次いで通過し、その中の一台が遮断機に接触したとのことだった。また、その後の鉄道会社への取材で得られた証言によると、トラックの運転手は『新政府』を自称し、口論の末、一時踏切を占拠していたという。

「なんかやばそうだな」

記事を読み終えた俺はそう呟いた。場所は今日行き着いた駅からそう遠くないところのようだった。

「『新政府』って九州にいたんだろ？ そんな突然ワープして現れたりするものかな」

話を聞いていたらしい田所は寝転んだままそう言った。確かにそれは不思議だが、何らかの不穏な動きが見られるのもまた事実だ。俺はだんだん不安になってきて、香織に連絡してみようと思った。外部領域には情報が伝わっていない可能性もあるし。

『そっち、大丈夫か？ 変なトラックが来てるみたいだけど』

俺は香織にメッセージを送信した。別に何ともないのならいいのだけど。

「そーいや俺たちが昼間行ったところの話をするの忘れてたな」

田所がガバツと起き上がってそう言うのと、久保田もいいねと言って話を始めた。俺もその話は気になっていたので、二人の話を聞くことにしたのだった。

そうして二人の話が続き、やがて昼間の話が終わると脈絡もなく話題が二転三転するようになった。大学の話や昔の思い出話、最近知った面白い話などなど。布団に寝転んだまま頭だけを寄せ合い、夜遅くまで語り合った。さながら修学旅行の夜のようにであった。あるいは意識して当時の真似事しているのかもしれない。次第に言葉数が少なくなり、静寂が訪れ、俺も眠りに落ちたのだった。

## 第四章

俺が目覚めたとき、二人はまだ寝ていた。時間を確認すると、まだ起きるには早い時間だった。昨日はあんなに夜遅くまで語りふけていたというのに、どういいうわけか目が覚めてしまったのだった。何か不安に感じていることがあったような気がしてきて、ぼんやりした頭のまま昨日のことを思い出した。そして『新政府』の話題が上がったことを思い出した。

「香織……！」

俺はメッセージを送ったことを思い出した。慌てて返信を確認したが、まだ届いていなかった。何か悪い予感がした。俺がこんな朝早くに目覚めたことに何か意味があるように思えてきたのだった。寝起きで回らない頭は、予定外の早起きと『新政府』の話題とを強引かつ短絡的に結びつけた。頭が勝手に物事を悪い方向へ考え始め、それはみるみる加速していった。心拍が上がり始め、俺の心は不

安で満たされていった。不安に堪えかねる形で立ち上がると、今度は使命感じみた感情に支配された。自分が行動しなければならぬような気分になり、一度そう思つてからは他のことが考えられなくなった。

「よし、行こう」

自分の決意が偽物でないことを確かめるようにそう小さく呟いた。俺は手早く着替えを済ませ、荷物を持って宿を後にした。

移動中、残してきた二人にメッセージを送った。昨日大幅な遅刻をした直後なのにこんなことになってしまつて、二人には本当に申し訳が立たない。今度何か埋め合わせをしないと。

メッセージを送信してからしばらく経つても返信は来なかつた。きつとまだ寝ているのだろう。昨日は夜更けまで話し込んでいたのだ。まだしばらく起きはしないだろう。

何時間か電車に揺られ、乗り換えを済ませた頃、香織からメッセージが届いた。  
『トラック？ そんなのいつでもいるわよ。大丈夫ってどういうこと？』

俺は昨日自分が送った文面を改めて読み返したが、焦りながら書いたせいで確かに意味のよくわからないメッセージになってしまっていた。

『『新政府』かもしれない集団が来てるみたいなんだ。俺も今そっちに向かってる。だから、気をつけてくれ』

俺は急いで返信をした。

ごおおつ、という音がして周囲が暗くなる。電車がトンネルに入ったようだった。昨日の俺はこんな爆音の中で熟睡していたのか……。今日も昨日と同様に寝不足ではあるが、不安と使命感、そこにちよっぴり高揚感が混じり、まったくと言っていないほど眠気を感じていなかった。

現在地を調べると、目的地までかなり近いところまで来ているようだった。俺は地図アプリを視界の片隅に表示させた。現在地を示すアイコンが少しずつ動いていく。

しばらくして再び香織から返信が届いた。

『運転してて返信が遅れたわ。『新政府』って何？ とういかあんだ、今こっちに向かつてるってどういうこと？ 旅行はどうしたのよ。迷子にでもなった？』

何だか話がちゃんと伝わっているのか不安になる返信だ。『新政府』を知らないのか。でも確かにそれを知らない俺の返信も意味不明だ。もしかして俺、文章でのコミュニケーションが恐ろしく下手？

俺は今度は落ち着いて整理された情報を送ってみるが、香織からの返信はなかった。地図アプリ上では現在地と目的地のアイコンがほとんど同じ位置に来

ていた。俺は地図を拡大した。距離から概算して、もうあと数分で到着しそうであった。

香織からの返信が止まったのが少し不安だった。また運転中なだけかもしれないが、状況がわからないというのはそれだけで人を不安な気持ちにさせるものなのだった。早く着かないものかと思うと、数分がとても長く感じられた。やがて電車は減速を始め、駅へと停車した。その駅へ足を踏み下ろすのは、実に一日ぶり二回目のことであつた。

「ここへ何しに来たんだい？」

駅の外へ出た直後、俺は見知らぬ初老の男に声を掛けられた。不安や緊張、そして何より『新政府』が来ているのかもしれないという恐怖から、俺はビクツと震えてしまった。恐る恐る声の主のほうを確認すると、そこにはいたって普通の



人がいた。普段街を歩いていたら数人は似たような人を見かけるんじゃないかという、普通の人。

「ちよつと知人に会いに来たというか。はは、そういう感じです」

俺はなんだか安心して、朗らかにそう答えた。男のほうはそれ以上の関心は無いようだったので、俺はその場を通り過ぎた。

とりあえず大通りを渡り、香織からの返信が来ていないかを確認した。返信はなかった。到着したぞ、というメッセージを送信してみたが、やはり返信はなかった。香織と連絡がつかない以上、どこへ向かえばいいのかわからない。当てずっぽうに探し回ってもいいが、俺は淡い期待を抱きながら昨日香織のバイクが停まっていた路地へ向かった。

「ドンピシャだったぜ……」

昨日と全く同じところにバイクが停めてあるのを見つけ、俺は思わずそう言葉を漏らした。香織はきつとこの辺りにいるのだろう。しばらくしたら戻って

くるはず。よかった、何事もなくて。しかしバイクがここにあることを見ると、返信が無いのは運転中だからというわけではなさそうだ。

俺はじつと待っているのも退屈だと思い、辺りを搜索することにした。隣の路地の壊れかかった建物のほうへ歩いてゆく。周囲に香織は、いない。その向かい側にあるゴミ捨て場を覗く。そこにも、いない。建物の中にいるのだろうか。近くに見えた入り口だけ壊れた建物へ恐る恐る入ってゆく。中は土埃がすごくて外から差し込んでくる光の筋がよく見えた。しかしそこにも香織の姿は無かった。錆びた鉄パイプが転がっているだけだ。ここもハズレか。そう思って後ろを振り返ると、そこには駅前であつた初老の男が立っていた。

「最初は仲間かとも思つたけど、お前、やつぱりどう見ても怪しいよなあ？ 企業領の人間様の知人がこんなところにいるわけないよなあ？」

そう言いながら男はじりじりとにじり寄ってきた。さつきとは明らかに様子が違つていた。そして俺は自分が致命的な見落としをしていたことに気がついた。

さつきは普通に見えたこの男、特別経済自治区にいても自然な男。それこそが最大の違和感であるべきだったのだ。ここは外部領域。特別経済自治区での「普通」は、外部領域では普通じゃない。そう、相手は全身にウェアラブル端末を身につけていたのだ。

「『新政府』……………!」

俺は後退りをする。

「なんだ、よく知ってるじゃないか。そんなに怯えるってことは、やっぱり敵ってことだよなあ？ その身につけてる高そうなもん、寄越せよ」

男は俺に掴みかかってくる。俺はその手を振り払って男の脇を駆け抜けようとしたが、男は俺を突き飛ばした。姿勢制御機構が作動し、俺は転倒を免れる。仕返しとばかりに俺も男を突き飛ばそうとするが、男のほうでも姿勢制御機構が作動して大した効果が見込めなかった。男に腹を殴られ、ボスンという音が鳴る。衝撃吸収機構が作動したため、痛みは無い。

「ちい、めんどくせえなあ」

有効打が与えられない現状に苛立った男がそう呟く。男は落ちていた鉄パイプを拾うと、ゆつくりこちらを向き直った。入り口の前を男がふさいでいたため、俺はその間何もすることができなかつた。

相手は人を襲うことに躊躇がなく、こちらは入り口をふさがれて逃げることをできない。鉄パイプを試し振りしながら男がつかつかと歩いてくる。いわゆる絶体絶命つてやつ？ でもきつとここで俺に前世の記憶が蘇ったり、突然異能に目覚めたりするんだよね？ ……え？ 何も起こらない？ ちよつと女神さん、早く仕事して。

男が鉄パイプを振り下ろした。俺は不恰好な体勢になりながら辛うじてそれを避ける。男が再び鉄パイプを振りかぶつたのを見て、俺は部屋の隅まで走って距離をとった。入り口から離れてしまったけれど、やむを得ない。そして大きく息を吸って――

「何でもいから俺に力授けてくれよバカヤロー!!!」

ヤケクソになつてそう叫んだ。誰か近くにいる人が助けに来てくれればラッキーという感じだったが誰も駆けつける様子はなく、当然天から力が舞い降りてくるわけでも……………。

《……………えるか？ 聞こえるか？》

「頭の中に直接声が!？」

あまりの驚きから思わず状況の深刻さを忘れてリアクションをとつてしまう。何？ 本当に女神様が力を？ あるいはこれは夢？

《おい、岸本！ 電話だ、電話。今どこで何してんだよ？》

電話？ 電話ね、なるほど。そういえば久保田にイヤホン代わりのアプリを教えてもらつてたんだつた。

「なんだ、田所か。今はちよつと外部で絶体絶命的な？」

俺は聞き慣れた友人の声を聞いて、少しだけ心が落ち着いてきた。

「なんだあ？ 氣い狂っちゃまったのか？ 一人でぺちやくちや喋りやがって。びびらせんじゃねえよ」

男には田所の声が聞こえていないから奇妙に見えることだろう。一瞬立ち止まっていたが、再び歩き出してこちらに向かってくる。

《周りに誰かいるんだな？ 自衛機構のリミッターは解除した？》  
今度は久保田の声が聞こえる。

「リミッターって何だよ？」

横なぎに振り抜かれた鉄パイプをまともに食らい、俺は弾き飛ばされる。衝撃吸収機構で衝撃を殺しきれず、脇腹のあたりに鈍痛が走る。

「いつてえ……」

《今リンク送った。踏むだけでインストールが始まるはず！》

久保田から送られてきたリンクをジェスチャー操作でタップすると、何かのインストールが始まった。通信規格が古いせいでやたら時間がかかる。男が振り下ろした鉄パイプを転がって避けるが、転がった先に男の足が飛んできた。

「ぐはっ……」

あばらを蹴られ、うずくまりそうになるが、気合いで立ち上がる。立っていないと一方的に攻撃され続けてしまう。

《インストールが終わったら自動でリミッターが外れるはずだから！ こっちからできるのはそれくらい。あとはどうにか頑張つて》

俺は久保田に礼を言いたいが、それをする余裕が無い。視界にはインストール画面が表示されている。あと少し！

男はもう目の前まで来ている。俺は足元の鉄パイプを拾い、男が振り下ろしてきた鉄パイプと打ち合わせた。ガン、という音がして両手に振動が訪れる。この手の衝撃には自衛機構は弱い。相手の男が顔をしかめているのを見るに、

きつと相手の手にも痺れるような痛みが走っていることだろう。俺は痺れて鉄パイプを取り落としそうになる両手に喝を入れ、鏝迫り合いを続けた。

そして——ふつ、と体が軽くなるような感覚があり、力が漲ってくる。俺は男を押し返すことに成功した。▶画面を見るとインストールが完了している。そのまま鉄パイプを突き出すようにして振ると、男はそれをまともに食らって体勢を崩した。俺は持っている鉄パイプを男に目がけて放り投げ、走って入り口を目指した。男は投げられた鉄パイプを身をよじってかわしたが、結果、姿勢制御機構を振り切ってしまった。尻餅をついた。

「勝ったと思うなよ！ 駅は俺たちが見張ってるからな！ お前はもうこの街から逃げ出せねえぞ！」

男のそんな捨て台詞を聞きながら、俺は建物の外へ飛び出した。男はしばらく追ってきそうになかった。

《岸本、大丈夫か！》



田所の声が頭の中に鳴り響く。

「まあ、なんとか……」

《俺たちもそっちに行く。今どこだ？》

「何言ってるんだよ。危ないから来るなよ……」

《行くつたら行く。絶対行くからな！》

田所は一度こうなってしまうたら止められないのだった。

《とりあえず、位置情報の共有だけはしておこうよ》

久保田が俺たちをなだめるように言った。三人がそれぞれ操作をし、地図アプリ上に三人の現在地を表すアイコンが表示された。

「ていうか、さっきのなんだよ？ リミッター解除なんて初めて聞いたぞ」

《スーツ型デバイスで身体能力を高めてるんだよ。争い事に使われたら危険だから普通は使えないんだけど》

「じゃあどうして使えたんだ？」

《まあ、そのへんはちよつとグレーなこととしてるから内緒で。そうそう、リミッター解除したままだと電池の消耗が速いから気をつけて》

腑に落ちない部分もあるが、まあこのへんが久保田の久保田たる所以だろうか。とりあえず今はこの機能が使えさえすれば何でもいい。

「わ、わかった。気をつける」

俺は再びリミッターをかけようとした。ちょうどそのとき、近くから大きな怒鳴り声があった。俺は操作を取りやめて声が聞こえたほうへ駆け出す。そこにはウェアラブル端末を身につけた男が二人と、香織の姿があった。

「香織！」

俺が声を上げると香織は驚いたようにこっちを見た。二人組の男も俺のほうを振り返る。

「なんだお前？ こいつの男か？」

「こいつ、企業領の人間じゃねえか。さっさとお家へ帰んな」

一人は俺のほうへ向かってきて、もう一人は香織に手を出そうとした。俺は向かってきた男の脇を走り抜け、もう一人の男の顔をぶん殴った。

「何しやがる！」

殴られた男は激昂して俺に掴みかかってきた。だがリミッターを解除している俺のほうが腕力で上回っている。男の腕を掴み、強引に組み伏せる。

「香織、早く逃げろ！」

俺はその場に立ち尽くしている香織に指示を飛ばす。

「あなた！ 後ろ！」

こめかみに衝撃が走り、かけていたスマートグラスが弾き飛ばされた。相手は二人組だ。組み伏せていないほうの男が後ろから殴ってきたのだ。それと同じ時に頭の中の田所や久保田の声が途切れた。何かの拍子に通話が途切れたのだろう。香織が思わず俺のほうへ駆け寄りそうになるが、俺はそれを手で制する。

「早く行けっ！」

俺は組み伏せていた男を離し、立ち上がりながら殴ってきたほうの男に裏拳を浴びせた。男のほうで衝撃吸収機構が作動するが、リミッターを解除した一発は重く、衝撃を吸収しきれずにノックバックする。

「でもあんた……」

「いいから行けつて!!」

香織はようやく決心がついた様子で遠くへ弾き飛ばされていた俺のスマートグラスを拾った。

「これ、絶対あとで返すから!」

「わかった! 昨日引き返したところで落ち合おう!」

香織は大きく頷くと、一目散に駆け出した。バイクにさえ乗れば追いつかれることは無いだろう。それまでせいぜい数分の辛抱だ。相手が二人だろうが、やっつけてやるぜ。そう思い、俺は二人の男に対峙した。

「もうちよつと近くで合流すればよかったなあ」

時間を稼いだあと、二人の男から逃げ出した俺はそう零した。あれからだいぶ歩いたが、追われている様子は無い。逃げ出すときはリミッター解除状態で飛ぶように全力疾走したからな。

今は合流地点に向けて歩き続けている。襲われている場では、俺と香織だけに通じる言葉で合流地点を決める必要があった。そのことを考えるだけで精一杯だったから、合流地点までの距離のことに気が回らなかったのだ。そういうわけで、俺は随分遠い場所まで歩いていくはめになっているのだ。腹減ったなあ。

すでに二時間ほど歩いていた。途中でスーツ型デバイスのバッテリーが切れ、日頃いかに姿勢制御機構に頼りきっていたかを痛感した。人に支えてもらいながら歩くのってすごく楽なんだよ。

スマートグラスが無いのも不便だった。現在地が把握できないのが不安だし、何よりリミッターをかける操作ができないせいでスーツ型デバイスのバッテリーが切れてしまったのだ。

それでもどうにか昨日通った道を思い起こし、合流地点の橋までたどり着いた。遅かったじゃない、とか言われるのだろうか。本当待たせてごめん。

「あんた……ボロボロじゃないの」

香織は川沿いの道に立っていた。

「ごめん、おまたせ」

香織のほうへ歩いていきながら俺は言った。香織は俺のほうへ駆け寄ってきた。

「あんた、なんで助けに来てくれたのよ……」

そう言つて香織は俺の胸に飛び込んできた。

「ば、馬鹿。服汚ねえからやめとけつて」

二度の交戦で俺の服は土に塗れていた。しかし香織は俺の服にしがみついたまま離そうとしなかった。俺は香織を引き剥がそうとして、そこでようやく香織が泣いていることに気づいた。香織の頭は俺の胸元くらいのところにあつた。俺はその小さな頭に手をやり、そつと撫でた。香織は小さく身じろぎした後、声を上げて泣き始めた。俺は、香織が泣き止むまではこうしていよう、と思つた。

辺りには川の流れる音が響き渡っていた。

「これ、返すわ」

香織はひとしきり泣いた後、俺にスマートグラスを差し出した。幾分すつきりした様子に見える。

「お、おう。ありがとう」

俺はそう言ってスマートグラスを受け取った。俺のほうはまだ気恥ずかしさが残っていて、なんともぎこちない態度をとってしまった。距離感が掴めないというか。

「あんた、これからどうするの？」

香織が言った。言われて初めて自分が何も考えずにここへ駆けつけてしまったことに気がついた。駅のほうには見張りがいるようだから、電車に乗って帰るわけにもいかなかった。スーツ型デバイスのバッテリーが切れている今、見張りの奴らと交戦するのは避けなければならない。そういえば解除したままのリミッターをかけ直しておかないとな。

「いや、行くあては無いな……」

俺はとりあえずスマートグラスをかけて言った。そしてほとんど癖になっているジェスチャー操作でアプリを開こうとした。しかし反応は無かった。

「あれ？」



何度か試してみたが操作が効かなかった。きつとさつき弾き飛ばされたときに外部認識用のスキャナが壊れてしまったのだろう。画面は表示されているのでまるつきり壊れてしまったというわけではなさそうだが、操作が効かないのでは時計としてぐらいいしか使えそうになかった。画面には現在時刻と、開きっぱなしだった地図アプリが表示されている。困ったな。人と連絡をとる手段も失われてしまったし、本当にこれからの行動に目処が立たない。

「じゃあ私の家に来て。ここからそう遠くないから」

香織がバイクを準備しながら言った。俺は反射的に遠慮しそうになったが、しかし現状では他に何か良い案があるわけでもなかったもので、そのありがたい申し出に従うことにした。

俺は香織の後ろに座った。

「しつかり掴まってなさいよ？」

そうやって香織はバイクを発進させた。姿勢制御機構の働いていない今回は、前回のように適当な掴まり方をするわけにもいかなかった。俺は気恥ずかしさに悶えながら、香織の背中に抱きついたのだった。

橋を通過し、住宅地へ突入したあたりで俺は絶句した。住宅地とは名ばかりで、その多くは廃墟化していたからだ。俺は昨日の香織の街案内が橋の手前までだった理由を理解した。これが外部領域の実情だったわけか。

廃墟の周囲は雑草に覆われており、ところどころに存在する空き地にも草が生い茂っていた。時折、広めの空き地のような土地が目に入ったが、それはよく見るとどうやら畑らしかった。

しばらく走った後、香織は一本の細い通りでバイクを停めた。

「どう？　びつくりしたでしょ」

香織はヘルメットをとって言った。俺は素直に頷いた。

「それで、ここが私の家よ」

香織は家を指差した。

「ここが……」

俺は指差された家を見上げた。きつと建てられた頃には立派な住居だったの  
だろう。だが今は、お世辞にも立派だとは言えそうになかった。特別経済自治  
区にあるどんなみすばらしい建物もこれよりは立派だろうと思った。

「どう？ 他の建物より遥かに綺麗でしょ。水道も使えるのよ？」

香織はそう言つて玄関に向かった。香織にはこの建物が綺麗に見えるような  
のだった。俺は香織が外部領域の人間なのだということを痛烈に意識すること  
となった。カルチャーショックで目眩すら覚えた。

香織は家に入り、電気をつけた。俺は玄関口で靴を脱ごうとした。

「電気もちゃんと使えるの。あ、靴は脱がないほうがいいと思うわ」

足元を見ると、床はうつすらと汚れていた。靴を脱いで歩いたら、靴下が真っ黒になってしまっただろう。俺は靴を履いたまま香織の後に続いて家に入った。香織に促されて俺は部屋に入った。部屋には机が二つあった。片方の机の上にはガラクタが広げられている。

「ちよつと待つてて」

そう言つて香織は別の部屋へ向かった。俺は机の前にある椅子に座つて部屋を見回した。生活感あまり無かったが、玄関よりは綺麗に掃除されている印象だった。

「香織はここで暮らしてるんだな……」

俺はそう呟いた。

しばらくして香織が戻ってきた。両手には半分に切られたカボチャが一つずつ乗せられている。ソフトボールよりひとまわり大きいくらい、小ぶりなカボチャだった。

「はい。あげるわ」

香織は片方を俺に差し出しながら言った。そう言えば朝から何も食べていな  
いな。時刻は三時過ぎ。思い出したように腹の虫が鳴った。俺は差し出された  
カボチャを受け取った。

「あれ？ これ、生……」

早速カボチャを食べようとして俺は固まった。ふと隣を見ると、香織はすで  
にポリポリと音を立ててカボチャに齧りついている。どうやらこのまま食べる  
ものらしい。

俺は意を決して生のカボチャをかじった。俺は生のカボチャもカボチャ味が  
するんだな、という当たり前の感想を抱いた。

「これ、どうしたの？」

カボチャを半ば食べた俺は香織にそう尋ねた。

「どうしたのってどういう意味よ？」

香織は聞き返した。

「いや、近くにスーパーとか無かったし」

俺はそう補足した。香織は皮の近くを残している。いやあ、やつぱそこ硬いよねえ。

「ああ、そういうこと。これはその畑からとってきたカボチャよ。まだ小ぶりだったけど」

「へえ、畑。香織が育ててるのか」

俺は感心してそう言った。

「いや、私が育ててるわけじゃないわ。その辺の、誰かが育ててるのよ」

香織はあっけからんとして言った。

とってきたカボチャって、盗ってきたカボチャってことかよ。

「えつと……それって大丈夫なのか？」

「種を返しておけばいいのよ」

いや、そういう問題では無いと思うけど……。

「それにあんただって食べたじゃない」

香織は反論した。それを言われてしまえばもう何も言い返せないのだった。これが外部領域の暗黙のルールなのかもしれない。じゃあ気にしなくてもいいか。郷に入っては郷に従えって言うしな。

「ところで他に家の人はいないの？　まだ駅のほうにいるなら帰ってくるように言わないと危ないかも」

俺は香織に言った。のんびりカボチャなんか食べている場合ではないかもしれない。この部屋には机が二つあるから、この机の持ち主がいそうなものだが。「人はいないわ。この家に住んでいるのは私一人よ」

香織は言った。親はいないのかとか、じゃあこの机は誰のものなのかとか、疑問は湧いてきたけれどそれを聞くのは何となく憚られた。

そうか、とだけ答えて俺は窓のほうを見やった。カーテンのついていない窓からは西日が差し込んでいた。もう夕方だ。俺はいつになったら帰れるのだろうか。

「こういうことは昔もあつたの？ 駅のほうを誰かに占拠される、みたいな」俺は今後の見通しをつけたくなつてそう聞いた。

「今回みたいに組織立ったやつは初めてね。駅のほうの治安が悪いのはいつものことだけど。金目の物を持つていそうだと思われたりしたら特に危ないわね」

香織は答えた。俺は、この話を聞いたのが昨日だったらあまり信じなかつたかもしれないな、と思つた。

「香織も危ない目に遭つたこととかあるの？」

「私は……無いわ」



香織はそう言っつて昔のことを思い出すような遠い目をした。俺は迂闊な質問をしてしまったと後悔していた。俺はどうしてこう、いつも考えが浅くて配慮に欠けてしまうんだろう。

「別に隠しておくことでもないし、あんたには話しておくわ。兄の話よ」

香織はそう言っつた。何か大事な話が始まる気がして、俺は椅子に座り直した。

「私には兄がいたの。私が乗っつてるバイクももとは兄のものね」

そう言っつて香織は話し始めた。

「兄はね、あるときからバイクに乗るようになって、それから街中を乗り回すようになったわ。私もよく後ろに乗せてもらってたの。たまに運転も教えてもらったわ。楽しかったわね……」

俺は香織が話すのを静かに聞いていた。

「でも兄は遊びでバイクに乗ってるわけじゃなかったの。もちろん楽しんでる部分はあったでしょうけど、それだけが目的なわけではなかったってことね」

「他の目的というと？」

俺は質問して続きを促した。

「ガラクタ集めよ。ほら、こんな感じのを」

そう言つて香織は机の上のガラクタを指差した。

「私たちはこういうガラクタから売れそうなものを見つれたり作つたりして生活していたの」

まあ今もそうだけどね、と香織が付け足す。

「でも歩いて行ける範囲でこういうものを集めるのは限界があつたわ。ガラクタといえどもやっぱり都市部に行かないとなかなか手に入らないから」

「それで行動範囲を広げるためにバイクに乗ってたつてことか」

俺は言つた。

「そういうこと。ガソリン代を払ってでもバイクを使ったほうが効率が良いわね」

現代ではガソリンの需要は大きく減っている。特別経済自治区でガソリン車を見かけることはまず無い。正確な相場は知らないが、ガソリンに高いイメージは無かった。電気や水素に比べて安いということでガソリン車の再普及を図ろうとしている国もあると聞いたことがある。だからきつと香織たちも元をとるのは比較的容易だったのだろう。

「それで集めてきたガラクタを朝に売りに行つて、その足で昼間はガラクタ集めをするというのが兄の日課だったの。私は毎朝起きて兄について行つたわ」

寝坊して置いてかれちゃったこともちよくちよくあつたけどね、と香織は言つた。

「兄について行つた日はね、都市部に着いたら兄は大通りを避けてバイクを停めるの。そして持ってきた売り物を一人で売りに行くのよ。専門の業者がいて

ね、そこに売りに行くんだけど、私は絶対に一緒には行かせてもらえなかったの。当時それをすごく不満に思っていたのを覚えているわ。今なら納得いくけどね。あそこにはいろんな人がいるし、いろんな物が取り引きされていてね、今でもちよつと怖いと感じるから」

香織は今でもそこに通い続けているのだろう。生活のためにグレーな取り引きを行う者も当然いるのだろう。香織のガラクタ集めだって厳密には不法侵入と窃盗ということになるのだろうし。まあ警察の機能していない外部領域では法律なんてあつて無いようなものなんだろうけど。

「それで兄がいない間、私はバイクの見張りをしていたわ。ちゃんと見張つててね、なんて言われて。当時の私はそれを自分の大事な役割だと思つていたの」

それは取引所に行こうとする香織をなだめるための方便だったのだろう。その話だけからも香織の兄が優しい人だったのだろうと想像ができた。

「ある日、いつものように私はバイクの見張りをしていたわ。それで兄の帰りを待っていたの。普段なら十五分くらいで帰ってきてたわ。でもその日は三十分経っても帰ってこなかったの」

香織は当時の情景を思い出している様子だった。

「待つても待つても帰ってこなくてね、だんだんなんかおかしいぞって思ってたね。それでたぶん昼過ぎまで待つてたんだと思う。もしかしたら夕方になってたかもしれない。私は大通りのほうを覗いてみたわ。でも取引所の場所は知らなかったし、周囲に兄がいるかはわからなかった。それでバイクのほうへ戻って、私はこう考えたの。兄は歩いて帰ったに違いない、私が一人でバイクに乗れるかテストする気なんだ、って。ちょうどその頃、私がバイクに乗れるようになってきたのを兄に褒められて、いい気になっていたのよね。そのときの私はそんな呑気なことを考えていたわ。当時の私はちよつと抜けてる所があったのよね」

香織は自嘲気味にそう言った。小さい頃なんて誰でもそんなもんなんじゃないかな、と俺は思った。それに抜けてるのは今もだろう、と昨日のことを思い出しながら思った。

「それで私は家まで帰ったわ。長い距離を一人で運転したのはそれが初めてだったわね。それを兄に褒めてもらおうと思つて帰つてきたのだけど、兄はいなかったわ。次の日になつても帰つてこなかった。都市部からはバイクがなくても半日くらい歩けば帰つてこれるわ。だから私はそこでようやく兄に何かあつたんだつて気づいたわ」

俺は黙つてしまった。そんな経験は当然、俺には無かつた。例えば瑞希と連絡がつかなくなつて、そのままどこにいるのか分からなくなる、みたいなことだ。今そんなことが起こつてもパニックに陥る自信があるが、香織の場合は子供の頃にそんなことがあつたのだ。きつと心に深い傷を負つただろう。

「私の話はおしまい。暗くならないで。私の中ではもう整理のついた話だから」

香織は努めて明るく言った。

「それよりこれからの話をしないと。このままだとあんたが音信不通のまま行方不明になっちゃうわよ」

そう言われてようやく、暗い気持ちのままじゃ駄目だと己を奮い立たせることができた。香織は強いなあ。

「ありがとう。確かにこれからのことを考えないとな」

俺は言った。スマートグラスの故障で俺は人と連絡がとれなかったし、香織は都市部でしかインターネットにアクセスできないようだった。「音信不通」の状態が変えられそうにないので、「行方不明」のほうを何とかする必要がある。あつた。

そのとき、外のほうから人の話し声が聞こえてきた。

「何だろう？」

俺はそう言つて、耳を澄ませた。声はだんだん近づいてくる。男の声だ。数は……二人だろうか。

「明かり、消すわよ」

そう言つて香織は部屋の電気を消した。香織の緊張した様子から、何か良くないことが起きているのだとわかつた。

男たちはやがて、声が聞き取れるくらいまで近くに來た。

「こつちのほうへ來るのは初めてだぜ」

「俺も初めてつす。でもさつき回つたところのほうか豊作だつたつすよね」  
「駅のほうにいた奴らだ、と俺は思った。」

「まあそう言うなよ。俺たちの役目は下見だぜ？」

「わかつてるつすよ。本番は明日つすもんね」



「いいか？　今日は目星を付けるんだ。まず明かりがついてる所は確実だ。それから窓が割れていないところも可能性が高い。他はまあ、何となく人が住んでいそうだと思つたところにマークをつけておけ」

「なんかめんどくさいつすね。人がいるかなんて、中を覗いちやえばいいんじゃないすか？」

「駄目だ。それで騒ぎを起こしたら周囲に警戒されちまうだろ。……でもまあ、ちよつとぐらいなら目を瞑つてやる。わざわざこんなところまで来たんだ。行きがけの駄賃に何か貰つていくくらいなら構わないだろう」

「なんだ、ノリノリじゃないつすか。じゃあまず、あの家、行きましようぜ」

俺と香織は息を潜めてじつとしていた。夕日が沈んで外は薄暗くなつていた。窓の近くでは虫が出たり入つたりしていた。やがて男たちの声は遠ざかつていった。

「はあ」

俺はため息を漏らした。そして香織のほうを見て言った。

「逃げよう」

香織は頷いた。俺は立ち上がって窓から外の様子を窺った。人影は無かった。俺は玄関へ向かおうとした。香織は部屋から出ようとして、ふと立ち止まった。そして振り返り、しばらく部屋を見渡した。

ここは香織の暮らしている家なのだ。出ていくとなると気持ちの整理もなかなかつかないだろう。

だが香織が決心するのは早かった。

「いいわ、行きましょう」

そう言つて香織は玄関へ向かった。やっぱり香織は強いなあ、と俺は思った。

俺たちは慎重に家の外に出た。香織はバイクの準備をしに行き、俺は周囲を警戒した。

香織が乗ったのに続いて、俺もバイクに乗った。エンジン音で彼らに見つかってしまった恐れはあったが、いざ遭遇したときのことを考えるとこのほうが良かった。スーツ型デバイスが使えなくなった今、俺たちに戦うという選択肢は無いのだ。どうせ逃げるのなら初めからバイクに乗っていたほうが良い。

俺は香織の家を見上げ、心の中で「さようなら」と呟いた。今日訪れたばかりなのに寂しさが募ってきた。不思議な感覚だった。

香織はバイクを発進させた。振り返ることなく、真っ直ぐ前を向いていた。

出発から二時間ほどが経過した。出発直後は人に見つかることを恐れていたが、幸いその心配は杞憂に終わった。駅のほうからなるべく距離をとるようになり、今は山の多い道を進んでいた。トンネルを通ったり、山を迂回したり、峠を越えたりとしながら、概ね西のほうへと向かっているようだった。追われ

ている様子はなく、あとはどこかの特別経済自治区へたどり着けさえすれば良かった。

だが、それが難しかった。視界には地図アプリが表示されているが、拡大されたまま操作が効かなくなっていたので使い物にならなかった。曲がりくねった道が多くて、実際にどれくらい移動したのかもよく分からなかった。おまけにもうすっかり夜になっており、辺りは真っ暗で何も見通せなかった。

大きな登り坂に差し掛かったところで香織はバイクを停めた。休憩だろうか。ずいぶん長く走ったもんな。運転に関して何も手助けができないのが口惜しい。俺たちはバイクから降りた。香織は道の端にバイクを押していった。

「登れないわ」

香織はヘルメットを外して言った。

「え？」

俺は思わず聞き返した。

「ガソリンがもうほとんど残ってないのよ。平らなところならともかく、登り坂はもう登れないわ」

香織はそう説明した。暗くて表情ははつきりしないが、声音から深刻そうな様子が伝わってきた。

俺は辺りを見回した。そこには真つ暗な山道があるだけだった。もちろんガソリンスタンドなんて無い。

「大丈夫。歩いて登ろう。登りきれば、まだ少し走れるんだろう？」

俺は努めて明るく言った。ここは俺が頑張らなきゃ、と思った。

「そうね……歩くしか無いわね」

香織はすっかり疲れ切っている様子だった。

「ちよつと休むか？」

俺は聞いた。

「いや、いいわ。歩きましょう。こんな山道にいても何も解決しないわ」

香織はそう答えて歩き出した。俺は香織に代わってバイクを押し歩いた。歩いてみると、バイクに乗っていたときより登り坂が何倍にも急に感じられた。

「なあ、香織は特別経済自治区に着いたら何がしたい？」

話していれば気が紛れるかと思つてそう聞いた。

「何でもあつたぜ？ 遊ぶところも、運動するところも、買い物するところも。あ、そういうえば飯を奢る約束してたな。何が食べたい？」

香織はしばらく考え込んで言った。

「よくわからないわ。私、企業領がどんなところかもよく知らないから」

「じゃあ具体的なやつじゃなくても。漠然と何か欲しいものとか」

俺は何か明るい話題が欲しくてそう聞き直した。香織はうーん、と唸った。

「私、年の近い友達が欲しいわ。外部領域には子供が少ないから。……いや、私なんか変なこと言つたわね。ごめん、忘れて」

香織は恥ずかしそうに言った。

「変なことなんかじゃないだろ。いいじゃん、友達」

俺は言った。そうかしら、と香織は呟いた。

「そうだな、じゃあ学校かな。学校に行けば友達ができるかもしれない」

「学校は無理ね。私、学校に行くお金なんて持ってないわ」

香織は残念そうに言った。

「無理なんかじゃない。きつと何とかなるよ。なんか大丈夫な気がする。多分！」

俺は勢い込んで言った。登り坂の終わりが近づいていた。

「ありがとう」

香織はそう言ったが、あまり期待のこもった様子ではなかった。

「そのためにはまず特別経済自治区にたどり着かなきゃだけど。でも、それも大丈夫そうだ」

俺のそんな言葉を空元気だと思ったのだろう。香織は苦笑いで再びありがとうと言った。

だが俺にはもう希望の光が見えていた。大丈夫そうだと言ったのは、空気でも何でもなく、根拠があつてのことだったのだ。

俺たちは登り坂の頂点にたどり着き、峠の先を見下ろした。そこには本当に光が見えた。それは車のヘッドライトだった。

「こんなところに車？」

香織は呟いた。

「ああ、助けに来てくれたんだ」

俺は安堵しながら言った。地図アプリ上では、田所と久保田の居場所を示すアイコンがこちらへ近づいてきていた。

やってきた車は俺たちの真横で停車した。

「悪い、遅くなった！」



運転席の窓から顔を出した田所が言った。運転席と言つても別に田所が運転しているわけでは無いが。

「岸本の出発が早すぎたせいでもあるけどな」

隣には久保田が座っていた。出発というのは早朝に二人を置いて出ていったことを指しているのだろう。

「置いていったのはごめん。でも、後悔は無いから」

俺は答えた。あのととき宿から出ていなければたら香織の助けに間に合っていなかったかもしれないのだ。

「置いていったことじゃなくて、黙ってたことのほうだよ。昨日の夜からそわそわしてただろ」

久保田は言った。俺は久保田が怒っている理由をようやく理解した。もつと頼つて良かったのだということだ。そしてそれがたまらなく嬉しかった。

「まあまあ、落ち着けて。とりあえず無事で良かった。とにかく乗れよ」

田所は俺と久保田をなだめるように言った。

「こいつらは俺の友達。助けに来てくれたんだ」

俺は香織に紹介した。香織は少し緊張した様子だった。

「おう、岸本よりは良識のある二人だからな。安心して乗ってくれ」

田所は気さくにそう話しかけた。ちなみにそのジョークは思いつきりすべっていた。

俺と香織は車に乗り込んだ。バイクはトランクから強引に押し込んだ。窮屈で悪いな、と田所は言ったが、不自由を感じるほどではなかった。

車は発進した。帰れるんだ、と俺は改めて実感した。その途端、不意に眠気に襲われた。車なら寝過ぎす心配は無いな、と俺は思った。

長くて濃密な二日間の旅行は、こうして幕を閉じたのであった。

エピローグ

それから一週間が経過した。この一週間は旅行の荷物を片づけたり、壊れたスマートグラスを修理しに行ったり、病院へ行ったり（ただの打撲と診断された。結構痛かったんだけどなあ）しているうちにあつという間に経過した。

そして今日は田所たちと焼肉に行くことになっていた。先日の旅行を途中で抜け出したお詫びと、助けに来てもらったお礼という形だ。今は出かけるために身支度を調べているところだった。

「どうしよう、まともな服が無いわ。前に会ったときと同じ服着てたら変に思われるわよね」

瑞希の部屋から香織が出てきてそう言った。

香織は現在、俺の家で暮らしているのだった。あの旅行の後、当然発生する問題として、身寄りの無い香織をどうするかという話になった。最初は田所が

実家にいる間、下宿先を貸すという提案をしたが、香織が遠慮したことで却下となった。実際、特別経済自治区に慣れていない香織を一人で生活させることに不安もあつた。香織自身はどこか別の外部領域で適当に暮らすと言つたが、即座に俺たち三人によつて却下された。どう考えても危険すぎる。それでいろいろ考えた結果、最終的に俺の家に来ることになつたのだ。実家暮らしで親がいることや、ちようど瑞希の部屋が空き部屋になつていたことなどが主な理由だ。バイクは田所がいったん預かることになつた。運搬に車が必要だつたし、俺の家には置くスペースが無かつたからだ。

香織を預かることについて、母親は「瑞希がいいつて言うならいいわよ」とあつさり承諾し、瑞希は上機嫌で「妹ができたみたいで嬉しいわね。私、本当はずつと妹が欲しかつたのよ」と言つていた。俺が妹に生まれてこなくて悪かつたな。

今日は香織も一緒に焼肉に行くことになっていた。飯を奢るといふ約束をここで果たすという恰好だ。

「別に同じ服でもあいつら気にしないと思うぞ」

俺は香織に言った。

「飯食いに行くだけなんだし、服なんか何でもいいだろ」

「そうかしらね……」

香織は不満そうだった。そこへ母親がやってきた。

「何でも良くなんかありません。可愛い香織ちゃんには可愛い服を着せてあげないと」

香織が家にやってきてからというものの、母親は香織にベタ惚れなのだった。

「瑞希ちゃんの昔の服があつたはずね。雅哉、ちよつと瑞希ちゃんに電話してちようだい」

俺は言われるがままに電話をかけた。今は土曜日の昼間だ。仕事中にはずなので、電話は繋がるだろう。実際、何回かのコール音の後、瑞希の声が聞こえてきた。

「もしもし、どうしたの？」

今はスピーカーから音声を出力している。

「あー、姉貴？　なんか、服を借りたいんだけど」

俺は言った。

「服ってアンタ、まさか……。あ、いや、香織ちゃんが着るってことね。そこに香織ちゃんもいるかしら？」

一瞬、何か変な勘違いをされたような気がするのだけど、たぶん気のせいだろう。

「はい！　香織です。瑞希さん、こんにちは」

香織が脇から出てきて言った。

「あら香織ちゃん、こんにちは。そんなに改まらなくていいのよ。服は私の部屋にあるやつ好きに使っていいから。困ったことがあったらお母さんに聞いてみて」

「はい、ありがとうございます」

香織は着替えるために瑞希の部屋に戻って行った。母親もそれについて行く。取り残された俺は一階のリビングへ向かった。

「香織ちゃん、本当いい子よね。礼儀正しいし」

瑞希は言った。瑞希も香織にぞつこんなのだった。なんだか疎外感があつて寂しいなあ。

「姉貴、そんなに香織に入れ込んで大丈夫？ 香織が出ていくときに堪えられる？」

俺は言った。香織がこの家にいるのは一時的なものだ。香織は特別経済自治区の支援を受けて学校に行けることになったのだ。そしてその支援には住居も含まれている。近いうちに香織はそこで暮らすことになる予定だ。

「そういうアンタのほうこそ大丈夫なの？ 恥ずかしいからまた泣き出したりしないですよ」

先日の見送りのときの話を持ち出して反撃されてしまった。

「だ、大丈夫に決まってるだろ」

「そう。それじゃ、お母さんと香織ちゃんによろしくね」

おう、と言つて俺は通話を終了した。香織はまだ降りてこない。

俺は特別経済自治区と外部領域の関係性についてぼんやりと考えた。これまでそういうことを考えたことはあまりなかった。

外部領域では今なお各地で暴動が起きていた。結果、香織のように住む場所を失う人も出てきていた。周辺の特別経済自治区を管理する企業らはそのような



人々に対する支援策をそれぞれ独自に打ち出していった。主に境界領域の再開発を行って、そこに外部領域で暮らしていた人たちを受け入れられる都市を作るといふ動きだった。政府もこの動きを認めていく方針のようだった。

特別経済自治区が広がっていくんだな、と俺は思った。境界領域は厳密には外部領域だが、そこが企業の管理下に置かれることになるのだ。きつと境界領域は特別経済自治区となり、現在境界領域のすぐ外側にある領域が新たな境界領域と呼ばれることになっていくのだろう。やがて外部領域はなくなって、日本全土が現在の特別経済自治区のようになるのかもしれない。

それはきつと良いことなのだろうな、と俺は思った。現在の外部領域は無法地帯になっている。そういうところがなくなっていくのは良いことなのだろう。その動きを加速させているのが外部領域での反乱だというのは皮肉な話だが。

「おまたせ」

降りてきた香織に声を掛けられた。グレーのワンピースを着た香織は、自分の慣れない服装に戸惑っている様子だった。すごく似合っている。

「恥ずかしいからあんまり見ないで。早く行きましょう」

香織はそう言つて玄関に向かった。俺はそんな香織の姿に、不覚にも見惚れてしまった。さつき瑞希に大丈夫だと言つたばかりなのに、俺は早速香織が家を出て行くときのこと心が心配になってきた。やつぱり泣いちゃうかも。

「何してるの？ 早く行くわよ」

ぼんやり突つ立っている俺に向かって香織は言つた。香織が玄関のドアを開けると、外から真夏の陽射しが差し込んできた。

「ごめん。今行く」

俺は急いで靴を履いて、香織を追いかけた。

外へ出ると、雲ひとつ無い大空と青々とした木々が目に飛び込んできた。陽射しが肌を突き刺し、蝉時雨が耳をつんざくようだった。

それはまるで、夏の本番はこれからだぞ、と語りかけられているようだった。

## 私と彼女のウェーバ

落合 未知

\*とある主人公の日常

ひと雨降りそうな空模様だ。つい先程まで肌を焼いていた日差しはすっかり鳴りを潜め、ホコリ混じりの雨の匂いが立ち始めた。そう思った矢先、遠くで雷の音が聞こえ、大粒の雨が降りだした。ここ数年の典型的な東京の夏空。よく晴れた日かと思いきや途端に大雨に見舞われる、ヒステリックな年寄りみたいな天気だ。

ふいと視線を落とすと、ピツタリくつついて歩くカップルが目に入った。

くつつきそうなほど寄り添うなんてものじゃない。実際、しつかりとくつついて歩いている。でも、周囲に誰もそれを見咎める人はいない。これが我々のニューノーマルで、それを受け入れられない人はそいつだけが除け者で、人という字は寄り添う二人の人間が形作っている。彼らの行き先なんて、きつと映画館かショッピングモールに決まっています、そこで数時間かを過ごしたら、夜は小洒落たイタリアンで写真を撮ってハッシュタグをつける。その後は、ああ、この世で最も想像に難くない。男の家に行つて二人でさらにピツタリと寄り添うに決まっているのだ。彼らのような、当たり前前に愛の形を実践して、そして一時はその当たり前を分けてあげようとしていた人々は、まるで自分たちがこの世界の主人公ですよと言わんばかりに振る舞うのだ。——私が、そうであつたように。

「溺れるくらいに降ればいいのに」

じつと空を睨んで、呟いた。一秒、二秒、待っても空は一向に湿気た曇のまま。どうやら、どこその主人公みたいに望むだけで天気を変える力はないらしい。モブの私はモブらしくため息をついて、手元のスマホで目的地までの道のりを確認して、また深くため息をつく。キャンパスからすぐの地下鉄に乗って途中までは地上を通らずに行けるけど、駅から先は地上を歩かないと駄目そうだ。あの子に道を聞いたときは全部地下を通って行けると言っていたはずなのだけれど。それに、今日は出かけるときに晴れだったからと油断して、傘を持ってきていないのだ。ちらりと時計を見る。どうやら雨が止むまでここで待機しているほどの余裕はなさそうだ。私は覚悟を決め、雨の中へと飛び出した。

\* 1

久々の対面授業を終えて大学を出ると、五時を少し回ったところだった。

朝に雨が降ったせいとか、湿気た空気に化粧がずると剥がれ落ちそうであるざりする。人目なんて気にしない方がいい、なんてことは百も承知だが、私はまだ人目を気にせず生きていくほどに年老いていない。とんでもない湿気と、湿気で崩れた化粧をこれでもかと照らすお日様のコンボは我々女性の天敵だ。

人通りの少ない曲がりくねった路地をカツカツと速足で歩く。私を囲む家々の、真つ暗な窓から人の気配は感じ取れない。大通りを走る車の音も次第に遠くなつて、自分のヒールが硬い路面を踏み鳴らす音だけが反響する。あれだけ五月蠅かったセミもまた、いつの間にやら今年の役目を終えて地中に帰つていつたらしい。

ふと、地元の高校の帰り道を思い出す。授業が終わった後はいつも二人で図書室に残つて、その帰り道だった。クラスのみんなと帰るときとは違う道、大通りからスツと脇へそれて、人しきくない空間を歩いて。あのときは無邪気に東京の大学へ来たたらなんのサークルに入るかとか、バイトは六本木の芸能人が

来るようなところに応募しようとか、そんな話ばかりしていた。そう思うと、今自分がその夢を叶えて東京に居るということに少しだけ胸が弾んだ。

六本木に着いたことを知らせるアナウンスが車内に流れ、プシューッと気の抜けた音とともに人込みに押し出されるようにホームに脱出する。

東京ミッドタウンにある私のバイト先には、割と頻繁に芸能人が来る。お笑い芸人の「○○」やモデルの「○○」なんかは常連さんだ。変装してやって来てバレないように帰る人もいれば、あちらから名刺を渡してくるような人もいる。だから、バイトを始めたばかりの頃は有名人が段々と店に戻り始めて本当に興奮したのを覚えていいる。今思えば田舎娘丸出しの黒歴史だが、「芸能人の誰々が店に来たよ！」とわざわざ友達に自慢のメールしたりしていた。

「千春ちゃん、三番テーブルさんお願い」



「はい、今行きます」

ホールに入るとすぐに仕事は始まる。注文を取って、料理を運んで、怒られたり、感謝されたり。指示された料理をなるべく優雅に、カッコをつけてお客の元へ運ぶ。お皿を出すのは必ずお客の左手から。ドリンクは逆に右手から。料理の説明はできるだけ頭に入れて。自慢ではないが、それなりにお客からの評判は悪くない。

「お待たせしました。オマールエビのローストです」

「お会計ですね、かしこまりました。本日はありがとうございました」

華金だけあって今日は中々に忙しいが、流石に一年以上続けた仕事だけあって、この程度の忙しさなら余裕である。一年も続ければ、憧れはすっかり薄らいでしまっているが、機械的にこなせるようになったことで仕事は楽になった。

「お待たせしました。生ハムと季節の野菜のサラダになります」

忙しきの波がピークを超え、客の姿もまばらになってきた。注文を受け取り、いつものようにテールブルの端から押しやるように料理を出す。

それでは、と微笑んで去ろうとした私を出し抜けな超えが引き留めた。

「あんたさ、今の出し方は失礼じゃないの？」

虚を突かれた私は、えつと腑抜けた息を漏らして声の主を見やる。中年の男性客で、見覚えのない顔だ。高校生くらいの子供と同じく中年の女性を連れている。

「今さつき、露骨に俺を避けて皿出したでしょ。この店は客を汚いものみたいに扱うわけ？」

男はこつちをじろりと睨むと唾を飛ばして早口にまくし立てた。

「申し訳ございません。感染症対策として当店ではこのようにしてサーブさせておくことになっておりますので……」

「決まりつて、そんなのありえないだろ。俺は昔からここよりもつと良い店で飯食ってるけど、こんな扱いされたことねえぞ」

「申し訳ありません。万一物理的接触があつた場合の影響を考慮して、以前とは異なる方式でお料理をお出ししております。御不快な思いをさせてしまったようでしたら、お詫びいたします」

私は再度、深く頭を下げた。こういうときは兎に角心を殺して謝るに限る。

\*

「いやー大変だつたね、あの客」

閉店時間になり、床の掃除をしていると先輩の西山さんが話しかけてきた。

「もう一年近く経つのに、まだあんなこと言う人もいるんですね」

「だよー。今まで通りに対応してなんかあつたらそれはそれでキレるだろうて。本当、ああいう奴には店長も一度バシツと言つた方が絶対いいよな」

そう言う先輩は何がおかしいのか、なははと笑った。確かに、先ほどの客は酷かった。結局私が謝り倒して店長も引つ張り出して、妥協点が「一品サービスする」なのだから。そこまでして食べる料理が果たして本当に美味しいのかと、店のスタッフ全員が呆れかえっていた。

「まあ、人との接し方が変わって気持ち悪いって感覚なら少しわかりますけどね。色々急が変わっちゃって、私もついていけないことばかりですよ」

「あー、俺もそれは分かる！ 飲み会なんかさ、お互いの距離はしつかり開けましようなんて言われて！ そんなん全然飲み会じゃないじゃんって思ったわ。あとは何かと女性専用エリアが増えて、男ばかり見飽きたつての」

「それは仕方ないですよ。やっぱり見ず知らずの人とくつついちゃうとか最悪ですし、引き剥がすのも中々手間だったりしますから——」

「あ、そっか。千春ちゃんって確か強い人なんだっけ？」

「そうですねー。結構困りますよ、日常生活も」

私はそう返答するとすつと距離を取りつつ、視線を床に落とす。

「強い」人というのは、HPTウイルスによる作用が強く働く人のことだ。

世界的に、働く力の強さで大まかに四つのカテゴリに分けられている。Eークラスは、Eークラス同士であれば殆ど引力も斥力もその影響に気づかないくらい弱い人。E心クラスでは、E心クラス以下と接触すると引つ張られている或いは押されている感覚を持つが、体が接触したとしても、容易に引き剥がせる或いは接触することができくらい。そして、E心クラスになると、Eークラスの人間との間にも力の影響を感じるレベルで、E心クラスで同極の相手に対しては接触できないほどの斥力が生じる。このクラスだと、感染者とは基本的に近づかように気を付けなければ大きな事故を引き起こすこともある。例えば、信号を待っていた感染者の非常に近くを同極の感染者が走り抜けた際に、生じた斥力で信号待ちをしていた側の感染者が車道に突き飛ばされ、ちょうど通りかかった車に轢かれてしまったという事件もある。

だから私が人と関わる機会の多いこのバイトを続けられているのも、店長の配慮によるものなのだが、理解されないこともある。オーダーを取ったり配膳をしたりするときには、五十センチ以上の距離を開けるよう工夫された方法でしか配膳ができないこと。ランクが原因で暴言を吐かれないように、ランクに関わらず同じ方法で接客することなど、挙げればキリがない。

「てかき、モップ掛けなら俺やつとくよ」

「えっ——」

機械的に手を動かしながら物思いに耽っていると、突然西山先輩が私の手からモップを取ろうとした——。

近づいてきた西山先輩の体に私の腕はグツと引き寄せられる。自分の意思に反して、粘着テープのように私の右腕は西山先輩の手のひらに吸いついた。

「キャッ」

情けない声が出る。反射的に手を引つ込めようとするが、そのせいで西山先輩まで引き寄せてしまい、全身がグイと密着する。私の力では体格のいい西山先輩の体重を支えきれず、そのまま二人して床に倒れこんだ。カーペットだったからまだ良かったものの、強かに打ち付けた頭に火花が走る。

「いてて……」

目を上げると、へらへらと笑う西山先輩の顔が間近にあつた。二メートル以上離れていれば所謂濃いイケメンだったはずのその顔も、わずか十数センチの距離で見れば、一日分の脂が溜まったイチゴ鼻に目ヤニが浮いた大きな目、何よりへらへらと歪んだ口元に一瞬で嫌悪感が沸き立つ。全身にぞわつと鳥肌が立った。

それでも私は努めて冷静に、苦笑いを浮かべて声を出す。

「離れてもらってもいいですか？」

「あー、ごめんごめん。すぐ離れるよ」

謝りながらモゾモゾと手を動かして私の体を床に押し付ける。肩を抑えられて肺が潰れるような感覚に息がコヒユつと吹き出される。次いで腰を抑えられてまた鳥肌が立った。なるべく見てはいけなと思うて目を逸らしていた顔を見てしまった。西山先輩は苦しそうな私を見て口元をゆがめていた。

全て剥がし終えた先輩は、さも「面倒な体質だなあ」と言わんばかりに私のことを見下ろしてくる。

「ごめんごめん！ わざとじゃないからさ、許して！」

その後先輩は平謝りだったが、それが故意だなんてことは分かり切っている。

「あー……。いいですよ。全然気にしてないんで」

息の詰まるような、つまらない日常のくだらない一幕。憧れたはずの都会の底で今日も私は息をする。



\*2

「ちはるー。起きてる？」

ほんわかした声に我に返った。

「あー、ごめん。ちよつとぼーつとしてた」

「なんだよー、私とのデート中に何か考え事？」

昨日のバイトで遭った散々な出来事を思い出して、私の意識は空の彼方へ飛んでしまっていたようだ。

「そんなんじゃないって。てか真夕は彼氏じゃないし」

「ちはるはやつぱりお堅いなあ。今どきは女の子同士でもデートなんて当たり前なんだから」

ぷんすか怒って、という表現がピッタリなふくれっ面をして真夕は腰に手を当てる。

「はいはい、怒らない怒らない」

苦笑して私の皿のパンケーキを一切れ真夕の皿に移してやる。

「あー、ありがとう！　ちはるちゃん大好き！」

こうしてあげると途端に機嫌が直るのが真夕の可愛いところだ。なんというか、小型犬みたいな単純さと愛くるしさに満ち溢れている。

彼女、折口真夕は私の高校時代からの親友であり、今は一浪して大学の後輩だ。高校生だった頃はおっとりとした性格で誰からも好かれるタイプだった真夕だが、おっとりとしているのは勉強においても同じだったようで、常に成績は平均の少し下だった。だから、私がよく真夕に勉強を教えたりしていたが、まさか本当に私と同じ大学に来るとは思いもしなかった。

性格はお世辞にも似ているとは言えない私たちだったが、本の好みは何故か似通っていた。一年の夏の読書感想文の課題で、全く同じ本を読んで、どちらかが剽窃したんじゃないかってくらい酷似した感想文を出したのだ。それがきっかけ

で話すようになったのだった。そういえば、その時から真夕は文学部に行きたいと言っていたような――。

「また、ぼーつとしてる」

パンケーキを頬張る真夕を見つめ、私が一、二秒黙っていると、真夕にまた咎められてしまった。

「ごめんごめん、色々あったなと思つてさ。高校生の頃はこんなことになつてるなんて想像できなかつたなつて」

「そうだねえ、本当に色々あつて、大変だった。私は去年たまたま浪人してたから受験勉強をしてればまだ良かったけど、それでも試験自体無くなるんじゃないかつてすごく不安だったなあ……」

真夕はパンケーキを食べる手を止め、しんみりとした声色で言う。

「どうやら真夕は私の思っていたこととは別のことを思い出したようだが、今「色々あつた」と言えばみんな真夕と同じ反応をするだろう。」

ヒト極性付与ウイルス (HPV<sup>+</sup> Human-Polarization-Triggering-Virus) 。

このウイルスが登場して一年、たったの一年で世界は全く変わってしまった。

昨年春に世界中で、あるウイルスのパンデミックが起こった。いや、正確には後から起こっていたと判明した。そのウイルスは当初ただの風邪だと思われていて、しかも風邪の中でも非常に軽い症状しか引き起こさなかったから、誰も気付かないうちに世界中に蔓延した。新型のウイルスだったから一瞬話題になったが、すぐに忘れ去られた。

しかし、このウイルス——HPV<sup>+</sup>が世界人口の二割ほどに感染したところで、ある症状が現れ始めた。感染者の間で磁力のような力が生じ始めたのだ。電荷のように感染者は二つの極のどちらかを持つようになり、同じ極を持つ人間同士は互いに斥力を持ち、異なる極を持つ感染者は引力が生じるようになった。力場の形状は複雑怪奇で個人に依存する分布を持つ。荒唐無稽な現象だ。この症状は去年の四月を境に同時多発的に世界中で発症し、世界中の科学者が対応策を考えあ

ぐねている間に全世界で爆発的に増殖した。国際社会は一丸となってHPTVの研究を行ったが、現在に至るまでこの症状の原因も完全に治癒する方法も見つかっていない。人工生命「KUDAN」の誕生に端を発する二十一世紀の受胎宣言<sup>エスト</sup>ですら、この問題については黙秘が続けられている。

それに伴って多くの「当たり前」は変容を余儀なくされた。例えば今、私と真夕を隔てる一枚のプラスチックプレートは感染者の接触を防ぐために導入されたものだ。人が密集することが物理的に難しくなったから、会議や授業は急速にオンライン化がすすめられた。たったの一年前まであんなに人でいっぱいだった東京からは、沈みゆく船を脱出するネズミのようにサツと人がいなくなった。

「でも、悪いことばかりじゃないよ。満員電車は禁止になったし、映画館は広くて快適になった」

取り繕うように口走る。

「そうだね。それに、こうしてまた会えたし……」

スツと、真夕の真つ白な手が私たちを隔てる透明な板の上に載せられた。その向こうでは驚くほど真剣な眼がこちらを見据えている。

つられて私も手を伸ばした。透明な板を挟んで、手と手をあわせに。

「うん。だからさ、きつとまた前みたいに——」

そう言う私の掌はプラスチックのプレートに少し届かない。十センチ、それが今の私と真夕の一番近い距離だ。

\*3

二軒目のカフェを出ると、既に時計は五時を少し回っていた。

最近は、この時間にもなるとめつきりと人が減っているのを感じられるようになった。電車の乗車人数が厳しく制限されるようになったせいだ。HPTVの症状

が多くの人に見られるようになってから、「密」な状況を回避しようという動きが非常に活発になった。人と人が密集してしまった場合に、同極ばかりの場合ならまだよいが異極の人間がいた場合は話が変わってくる。特に男女同士の場合は、男女どちらにも大変不幸な事故を引き起こすことになる。そこで、政府はまず電車やエレベーターなどの閉鎖空間における最大積載人数に厳しい制限を課した。

その結果がこの、ガラガラの歯抜けた街だ。とても二年前にはハロウィンで警察隊が出動する程の盛り上がりを見せていたとは思えない人通りの少なさだ。

私は、敢えて広い道のど真ん中を大きく手を振りながら歩いてみせる。

「真夕はもうこっちの生活には慣れた？」

「うーん、まだまだかな」

「そっか。何が一番慣れない？」

「一番？ うーん、やっぱりこれかなあ」

そう言うとき真夕は体の周りにふわりと腕を回転させた。すると、その周囲、腕から三十センチほど離れた位置で白いリボン状のプラスチックがカシヤカシヤと釣られて舞う。

「ああ、確かにそれは邪魔よね。私も油断するとドアに引っ掛けちゃったり食べ物がついちちゃったりして困るわ」

「そうなの。私たちの町なら対人距離確保器具を着けなくてもやっていけたけど、東京だと必須だし、やんなっちゃうよ」

対人距離確保器具。真夕がひらひらと躍らせて見せたそれは、腕と胸の周囲三十センチほどの領域を囲うプラスチックのリング状補助具だ。それ自体に何か特別な機能があるわけではないが、HEPを有する患者同士が接触してはいけない領域の目安として機能している。だから、基本的にはどれだけ人混みが形成されていても、このリングを超えて接近することは許されない。確かに、真夕の言う



ように非常に不便な代物で、慣れるまではそこかしこにぶつけてばかりだったのだけれど、私のように重度の極性を有する患者にとつては皆がこれを身に着けてくれるおかげでなんとか日常生活が送れていると言つても過言ではない。

パチンパチンと、真夕が腕を振るたびに、鱗のように連なつたプラスチックの板が音を立てる。こんな、頼りなくてうつとうしいものに頼つてなんとか私たちHPTV患者は日々を過ごしている。きつと20世紀のSF作家に今の現実を見せたら誰もが落胆の溜息をこぼすであろう、そんなどうしようもない現実。この安っぽいプラスチックの、衣擦れの音だけが私たちにとつての二十世紀だ。

「また来週、会えるかな？」

ふと、前方を歩いていた真夕がぐるりとターンすると、にはっと笑つて尋ねる。

「私はいつでも暇だよ。サークルやらクラスやらもうやむやになっちゃって友達いないし」

「あはは、そういうところ、ホント変わらないよね。じゃあ来週もどこかいこ！約束ね！」

「はいはい。真夕こそ、せつかくの夏休みなのに私と会ってばかりで大丈夫なの？」

「私はその辺りうまいことやってるの！知ってるでしょ？」

そう、真夕は昔からおっとりした性格とは裏腹に人間関係の構築能力においては誰よりも長けていた。私がほんの二、三の単純な予定を進めるのにあくせくしている間に真夕は幾つものグループで計画される遊びの予定をまるでパズルのように被りなく配置していくのだった。しかも、真夕のすごいのはそれらの予定のどれも心の底から楽しんでいるように、少なくとも傍から見ている分には感じさせるように振舞っていたことだ。もちろん、複数のグループに所属することは

グループ間の見えざる軋轢に晒されることにも繋がる。普通はそうした軋轢に耐えかねてどちらか一つのグループを選ぶか、選びきれずに蝙蝠扱いをされて結局どちらのグループからも爪弾きにされてしまうかなのだが、真夕はひらりひらりと華麗に軋轢を回避して高校三年間を乗り切っていた。

要は、折口真夕はとんでもなく生きるのが上手いのだ。私にはない器用さ。時に妬ましく、時に私を不安にさせるその存在は、それでも今、このパンデミックに陥った後の東京という都市においては確実に私の心の拠り所だ。

そんな思考の澱に沈んでいると――

「真夕ちゃん！」

後方から私たちを呼び止める声があった。私も真夕も、その重低音の方を思わず振り返ると、仕立ての良いジャケットに身を包んだ大学生風の男がこちらに向かつて手を振っていた。

「健司君！」

「よっ、偶然。渋谷にいるなんて珍しいね。何してるの？」

「竹上通りのカフェに行つたの。あそこのパンケーキ、ユミがインスタに上げてて美味しそうだったから！」

ほら見て、とスマホを取り出して写真を見せると、健司君と呼ばれた男はおー、美味しそうと言つて笑う。普段から子犬のようだとは思つていたけれど、今の真夕はまさしく飼い主に尻尾を振る子犬だ。そして私はというと、随分と親しそうな雰囲気のスツと気配を消す。すると、居づらそうな私の雰囲気を察したのか、  
「健司君」は私に向き直ると申し訳なさそうにはにかんだ顔で話しかけてきた。

「ていうかごめんね。いきなり話しかけて誰だよって感じだよね。俺は△大二年の本郷健司。真夕とは△大で同じサークルに入ってるんだ。よろしくね！」

「あ……はい。どうも、△大の黒崎千春です」

本郷健司と名乗った男の溢れんばかりの陽気さを前に、「絶対にあわないな」と確信した私はすかさず真夕の背中に隠れてぼしょつと消え入るような声で返事

をした。これは偏見だけれど、この手の初対面から異様に爽やかかつ距離が近いタイプの男は例外なく常時二股をかけている。そして二股をかけている方の女は自分のことを彼女だと思っっているが、この男にとってはただのセフレなであり、決してそれ以上の存在にはなり得ない。そうした割り切った関係だと思っただけ接しているからこそ隙を見せることもなく、したがってモテるのだろうが、セフレな扱いされる女の方からすればたまったものではない。だから、こうした男は絶対に警戒してパーソナルエリアへの侵入を許さないという点でこのときばかりは対人距離確保器具カに感謝だ。

「同じΣ大なんだね、よろしく。学部はどこ？」

「……情報システム工学部です」

「もしかして、警戒されちゃってる？」

本郷は苦笑して、私ではなく真夕に聞くようにしてつぶけた。水を向けられた真夕は本郷と瓜二つな表情を浮かべて答える。

「あー、ごめんね。ちはるちゃんは凄くいい子なんだけど初対面の人には人見知りしちゃうから、あんまりからかわないであげて。あと、こう見えて健司君と同じ二年だからね」

「了解、了解」と本郷はお手本のように爽やかな笑顔で応じた。どうやら清々しいまでに爽やかな人間らしい。

「もう、本当にわかってる？」

「わかってるって。そういえば少し話は変わるんだけど、真夕って来週の予定は空いてる？ 三橋先輩がバーベキューやるらしくて、真夕にも参加して欲しいらしいんだ。都合が良さそうなら一緒にどうかかな？」

「あ、行けます。……けど、うーん、来週はちよつと……」

言いかけて、真夕はチラリと私の方を見る。その眼の奥にはうつすらと迷いという意味が浮かんでいる。

「行つてきなよ。私は基本いつだって暇なんだからさ。また今度でも会えるよ」

仕方なく私は真夕の背中を押してやることにする。とはいえ、真夕のことだ。どうせスケジュールはもうピッチリと埋まっているだろうから、また会えるとは言つたもののいつ会えるかは分からない。

ふいと本郷の方に視線を向けると、眼で「いいから誘え」と語りかける。この意図を察せない本郷ではないだろう。

「そういうことなら、先輩には真夕が来るって伝えておいていいかな？」

「えつと、でも、千春はそれでいいの？」

「だから私は大丈夫だつて。気にしすぎだよ、真夕は」

「……うん、そうだね。じゃあ、私は行くつて先輩にはよろしく言つておいて」

申し訳なさを多分に残した真夕の返答に、ふむ、と本郷は顎に手をやると、

「いや、せっかくだから黒崎さん一緒に来ない？」

「……は？」

あまりにも予想外の提案に思わず間の抜けた声が漏れた。

「うん。だって黒崎さんも同じ大学だし、来週の集まりは新歓も兼ねてるから初見でも来れると思う。というか一応黒崎さんって同学年だよ。真夕の友達だからいいかなと思っただけど、もしそれが気まづかったら全然大丈夫なだけだよ」

「あー、いや、学年云々はいいんですけど……」

丁寧なお断り言葉を探して毛先をもじもじといじっている、

「それいい！ ちはるちゃんも来週一緒に来ようよ！」

ぽかんとしていた真夕が、突然大声を上げた。

「いや、私はそういうの全然いいから」

「えー、でも絶対楽しいよー！ みんないい人だし、ちはるちゃんなら絶対仲良くなれると思う」



いやいや、流石にそれは厳しいでしょ。私の内気で陰気な性格を真夕が知らないはずがないし、本郷という男はどうやら何もなく陽気で爽やかで友達が多いタイプだ。こういう正反対の性質の人間を集めても、差し引きゼロどころか負の相乗効果で誰も幸せにならない結末を迎えることは長年の経験から明らかである。残念ながら私とチーム本郷は磁石のN極とS極のように引き合うこととはなく、どちらかというと絶対に混ざり合わない存在なのだ。私のような陰キャラが顔を出そうものなら、途端にその場は四面楚歌。いや、故郷の歌が聞こえてきて気づくまでもなく普通に全員に石を投げられる。

などと考えて苦い顔をしていると、真夕はほそつと

「……それに、ちはるちゃんとの約束を破るのも悪いし」と小さな声で付け足した。

「いや、そこは気にしないで欲しいけど……」

「やっぱり、ダメ？」

ダメ押しと言わんばかりに瞳を潤ませ、声を震わせ、あざとく見上げてくる。

いったい何人の男をこの仕草で落としてきたのだろうか。最早職人の域に達して、いそうな完成度だが、やはりそういう顔をするのは反則というものだ。私は降参し、「真夕が言ってるから参加はするんだぞ？ 決して私が行きたいわけではないからな？」顔で本郷の方に視線を投げる。

「うん。どうやら話はまとまったみたいだね」

本郷はニコリと微笑むと、「これで話は終わり」と言わんばかりにパンつと手を打った。その表面上柔らかくも有無を言わさぬ仕草に、私の警戒はより一層強くなる。

「おっけー！ ありがと、ちはるちゃん！」

「それじゃ、真夕、黒崎さん、当日はよろしくね」

本郷は去り際も爽やかに、水のように街の雑踏へ溶けていった。

「で、なんでまた突然誘おうと思ったわけ？」

本郷を見送って私はすぐに真夕を問いたでした。

「だって私はちはるちゃんが好きだし、健司君たちも好きだからさ、私の好きな人たちが一杯いる場所ができたならそれって幸せでしょ？」

ゲームセンターから漏れる青白い光に半身を照らされながら、あっけらかんと真夕は言い放つ。言葉とは裏腹に、真つ白な肌に影が差した人形のような顔にドキリとする。

「はあ……呆れた。いつものことだけど」

「でしょ？　そういえば、高二の文化祭のときも確かこんなことあったよね」

「ああ、そういえばあったね。クラスの出し物で劇をやることになって、私はやるつもりなかったのに真夕が突然衣装係に私を指名したやつ」

「懐かしいねー。あのときも結局ちはるちゃんのおかげで大成功だったよね？

小宮山君が二階さんにサプライズで告白したり、大盛り上がりで……だから、きつと今回も大丈夫だよー」

「いや、私の記憶だと文化祭終わった後の打ち上げには私出てないけどね」

「……楽しみだなあ、来週末」

真夕は、私のちよつとした愚痴など聞こえませんというように、カチカチとスピーサを鳴らしながら歩く。

#### \* 4

満開の日差しを受けてキラキラと光る水面の周りは、培養した細胞のようにカップルで溢れていた。しかし、ごった返した人混みにも今は一応の統制があるようで、ディスタンスの定めるメートル間隔以上を開けて人間が配置されている。その為、一番人が密集するところは自然と最密充填の配列を取っている。

自然の摂理を感じる感動的な風景だ。普段どんなに自然を克服した王者のつもりでいる人間であつても、やはり自然の摂理には逆らうことができないパーツに過ぎないのだと感じさせてくれる。

「まだ一時、あと四時間は帰れない……拷問……」

ぼろぼろと言葉が唇の隙間から零れ落ちる。完全な失言なのだけど、失言つて何故か気持ちいい。でも将来ボケ老人になつておむつに失禁してしまうのもコレと同じ感覚なんだろうなあ、嫌だなあなんて考えながら地平線の彼方を見つめて遠い将来に思いを馳せる。ぱちぱちと肉の焼ける音が肌に熱い。今日の気温は三十五度だそうで、BBQ グリルの発する熱と合わさつて私の頭は完全に思考力を奪われていた。

そう、私こと黒崎千春は今、真夏の川辺で他人に囲まれて BBQ をやっている。親友である折口真夕に誘われて（連行されて）のこのこやって来てしまったが、まさか人生で最速最深の後悔の念を抱くことになるとは。驚くほどに

世間の抱く大学生<sup>々</sup>的なノリの陽キャ集団の中に、陰気な女が一人放り込まれたのだから当然だ。ライオンの群れの中に混ざってしまった子犬のように肩をすくめて小さくなつて朝からずつと過ごしていた。しかも、何が悲しいかというところ、最初のころは

「おいつすく！ 初めましてだよね、三年の〇〇（忘れた、たぶん苗字をもじつたあだ名だった）です！ よろしく！」などとテンション高めに絡んできてくれたり、あまりうまく応対できない私が会話に入れず隅の方で固まっていると、「ちはるちゃんは楽しめてる？ 今日来てる人は結構面白い人多いから色々話してみるといいと思うよ」

など話しかけに来てくれたことだ。つまり、敵だと思っていた陽キャが実は結構いい奴の集団だった。そして、この場において最も輪を乱しているのが私であり、最善を尽くして私も楽しみの輪に入れてくれようとする彼らはむしろ何の罪もない善人なのだ。そう、これがあるから陽キャと関わるのは辛い。例えば陽

キヤがテンプレ的な性格の悪い集団で、初対面からマウントを取ってくるような奴らだったとすれば普通に辛い、逆に凄くいい人の集まりでなんとかして陰キヤである私も集団の輪に入れようとしてくれたとしてもそれはそれで自分の無能を自覚させられて辛いのである。したがって私は、嵐が過ぎ去るのを待つ子羊のように、なるべく隅っこで縮こまっていようと心を固め、じつと時間が過ぎ去るのを待つのだった。

さて、かれこれ三時間ほどの時が流れ、宴もたけなわ六合目といったところに差し掛かってきた。相変わらず場はあつたまり過ぎているほどにホカホカだ。そして、私はというと……

「あはは、黒崎さんって面白いね。なんかセンスが独特？　こういう人って初めて見たかも」

「わかる。普通と違うよね」

「それはどうも……」

何故かサークルメンバーの中心人物らしき界限に取り囲まれ、動物園のパンダの気持ちを味わっていた。

理由はわからないが、私の対応に彼らの琴線に触れるところがあつたらしい。期せずして「おもしれえく女」ポジションを得てしまった。

「あとき、普段大学でぼっちだと困らない？ ノートとか見せてもらわないと休んだ時大変じゃない？」

「いや、まあ休まないし毎回ノート取ってるんで大丈夫です。それに、たぶん後ろでたむろってる友達多そうな人より点数も取れていますし」

「そういうところよ！」

私の返答の何が面白いのか中心人物△△は全員爆笑している。



「いや、笑った笑った。ていうか、真夕ちゃんも黒崎さんを見習わないと！  
こんな面白い人の横に居たらポジション取られちゃうよ！」

「えー、私あんまり真面目じゃないんでちはるちゃんの真似は無理ですよー」  
突然水を向けられた真夕は頬を赤らめて、いつになく震えた声で返事をした。

「いやいや、そこを頑張らないとき。ウチはキャラ濃いやつが揃ってるから、  
黒崎さんが入ったらヤバイよ！」

「自分が連れてきた子に食われちゃやばいつしょ」

そんな真夕の様子など意にも介さず、中心人物たちは下品な笑い声ばかりあげる。

「あはは、そうなたら困っちゃうなあ。先輩、なんとかしてくださいよー」  
媚びた笑みを浮かべて先輩とやらと話す真夕。昔は、同じ学年のグループの  
中で話す真夕しか見たことが無かったから年上と話す姿なんて考えたこともな

かったけど、言いようのない嫌な気持ちが胸に広がるのがわかる。これがきつと真夕なりの処世術で、今までこうやってずっと生きてきて、これからもこうして生きていくのだろう。それでも、なんだか私は見てはいけけないものを見たような気持ちになってしまった。

「えー、それって本当なの!？」

「マジらしいんだって! 俺も半信半疑だったんだけどさ、友達のそれで付き合  
い始めたやつらは全員うまくいってんの」

ひととき大きな声が聞こえてきて全員の注目が集まった。話しているのは確か、浦野とかいう男だ。明るい茶髪に似合わない濃い目の顔で元の素材は悪くないだろうに、「なんかうるさくてキモイ」と女性陣に陰でひそひそと話されていた。

「なになに、なんの話?」

「いやそれがさ、嘘みたいな話なんだけどさ、引き合う力が強い男女は相性がいいらしいんだよ。だから、ウイルスが、運命の相手、を見つけにくれてるんじゃないかってネットで噂になってるんだよ」

「あ、それ私も聞いたことあるかも！ この前ツイッターで流れてきたやつだよね」

「そうそう。噂自体はもうちょい前から流れてたっぽいんだけど、それ信じた俺の友達がこの前バイト先の子にアタックして付き合い初めて、すつげえうまくいってんの。お互い話は合わないけどなんか一緒にいると落ち着く？ みたいなこといってさ」

思わず聞き耳を立ててしまったが、確かにその話は聞き覚えがある。正直眉唾もの話だと思うが、必ずしも否定はできない。例えば、ウイルスが宿主の子供にも感染し得るのだとすれば、一つの仮説が立てられる。ウイルスが宿主に子孫を残させるために、宿主の遺伝子情報を元に選択的に力場を発生させて

いて、遺伝子的に相性の良い個体同士は強く惹かれあうように制御している、などはパツと思いつく仮説だ。荒唐無稽だが、確かにこの仮説でウイルスの行動は説明可能なように思えるけれど……

「でもそれだとき、HPTVの症状の強さが人によってかなり違うのはおかしくないか？」

私がいままさしく今考えていた懸念を本郷が表明した。

「うーん、確かに強く引き合う相手が運命の人っていうのはドキドキするけどさ、そしたらエムクラスの人なんかは殆どの異性が運命の相手になっちゃうよね。確かにエムクラス以下の人だと相手によつてはHPTVの症状が殆ど出なかったり、逆に凄く強く引き合う相手もいるからあり得るかもつて気がしたけど、エムクラスの人には相手によらず引き合うじゃん。それはちよつとおかしくないかな？」

「あー、確かに……」

皆が本郷のまつとうな疑念に納得しかけた、その瞬間だった。

「じゃあ、エトクラスの人は潜在的に凄く性欲が強い人だったり？」

一瞬、場の空気が凍った。先ほどまで押し黙っていた真夕が思いもよらないことを言い出したのだ。

「真夕？」

本郷も驚いた表情を浮かべて困惑している。

「うーん。だって、そうじゃない？ もしウイルスが自分の運命の人を教えてください。くれてるんだとしたら、普通はそういう相手って一人とか、多くても三人のはずだよな？　なのに殆どの異性が運命の人で同性は遠ざけるみたいなのってビッチっぽくない？」

「いや、それはおかし——」「そうかも！」

本郷の声をかき消して、中心人物らしく振舞っていた三年生の女が声を上げた。そして、その声を境に一気に流れが変わる。

「確かに私の知り合いもエムクラスだけど確かにそんな感じかも」

「あー、なんかわかるかも。顔は良いんだけど性格悪い人が多い気がする！」

最初は真夕の爆弾発言に驚いていた人々も、我先にと同意の声を上げ始めた。

その様子はまるで親鳥の興味を引こうと必死な雛のようで、同調圧力のすさまじさに圧倒される。真夕が全然キャラじゃないことを言っていたことなど最早誰も気にしていないようで、皆口をそろえてエムクラスはビッチ説を唱えている。

きつと真夕は彼らと心底同じなのだろう。集団の中で立ち位置を得ようと必死で、独りでは居られない人たち。それはきつと悪いことではなくて、むしろ人間にとって自然なことなのかもしれない。

スツと真夕に視線を向け、いま彼女はどんな表情をしているのだろうかと思ってみる。紅潮した顔で先輩の言うことに相槌をうち、お腹を抱えて笑う。ずっと見ている、真夕が私の視線に気づく様子はなかった。

\*5

結局私はサークルの雰囲気になんて耐えかねて、一人会場を抜け出した。

真っ赤な夕日に照らされる河川敷の情景は、ある種のステレオタイプを思い起こさせる。なんだか無性に「バカヤロー！」と叫びだしたくなる景色で、その何とも言えない温かい包容力に、思わず本当に叫びだしそうになる。それこそ、今日はそういう気分だった。

帰りに熱々のコロッケでも買い食いしてしまおうか、そんなことを考えていると、

「黒崎さん！」

大声で私の名前を呼ぶ声が聞こえる。振り向くと、バタバタとこちらに駆け寄る本郷の姿が見えた。追いついて私の隣に立つと、ゼーはーと肩で息をしている。

「はあ、いきなりいなくなるからびっくりしたよ。そんなに今日はつまらなかつた？」

「いえ、別にそういうんじゃないので、大丈夫です」

大きな目をくしゃりと縮めて苦笑する本郷は、私がなんと答えるかなど予想していたふうだ。私はというと、そんな態度に無性に腹が立って思わずぶつきらばうな物言いになってしまう。

「……あんまり、気にしないでもらえると嬉しいな」

「何をですか？」

「真夕ちゃんのこと。それと皆が言ってたこと」

本郷の言葉に、思わず足が止まった。眉をしかめて本郷の顔をねめつける。

「別に気にしてないですよ」

鞆の肩紐を握る手に力が入る。

「黒崎さん、エムクラスなんでしょ？」



「……」

「この前会った時、必要以上に俺と距離取ってたからさ。それに今日だって、人が多いところは絶対行かないようにしてたでしょ。そういうので、案外わかるもんなんだよ」

「だったらなんだっていうんですか？」

「真夕がどういうつもりであんなこと言ったのかは知らないけど、悪気があったって言ったわけじゃないと思うんだ。あの子は結構お嬢様気質というか、自分が中心じゃないと満足できない性格みたいだから。今日は人数も多かつたし、ちよつとストレスがたまっていたんだと思う。それに、みんなも本当はあんなことを言うような奴らじゃないんだよ……根は良いやつらなんだ」

「そんなこと、言われなくても知ってます。何年一緒に過ごしてきたと思ってるんですか。他の皆さんのことはわかりませんが、それもなんとなくわかります。ですから、放っておいてください」

そうだ、私は真夕とずっと一緒にいた。一朝一夕の関係ではない。真夕の性格が決して良くないことなんか知っているし、真夕が私のことを意識していたことだつて知っている。ただ、それでも真夕は私の一番の友人なのだ。少なくとも私はそう思っている。だから、このぼつと出の本郷何某という男に言われるまでもなく何の問題もないのだ。

「でも、実際君は……。いや、よそう。俺の過干渉だった」

本郷は、出かかった言葉を意外なほどにあっさり飲み込んだ。

「今日は色々とごめん」

ぼそりと謝罪する本郷に、最初に出会った時の軽薄そうな印象はすっかりない。去り際、小さくなった本郷の背中が作る細長い影が目にかかった。

「……情けない」

誰にも聞こえないように呟いた声が、小さな影を揺らしたような気がした。

\* 6

「これは一体どういうことですか？」

尖らせた唇からは、やはりとげのある言葉しか出てこない。

「どうって、BBQ やったときに作ったグループライン伝いに友達追加して連絡して、会うことになったんじゃないか」

「いや、私返信してないですよね？」

「そうだね。だから真夕に黒崎さんの取ってる授業を聞いて、授業終わりに会いに来た」

「そもそもあのグループラインも帰りの電車で抜けたんだけど……」

「だろうね。そうするだろうと思ったから、先に友達追加しておいたけど」

「……」

逃げようかな、本能的にそう思った私は自然と歩く速度が早まる。図書館に行くつもりだったが、当然のように通り過ぎてどこかへ行こうかしら。

「待つて待つて。ストーカーとかそういうのじゃないから！」

小走りで、歩みを速めた私の前に本郷が立ちふさがる。

「いや、ストーカーじゃなかったら逆になんなの？ 私のファン？」

私の言葉が余程意外だったのか、本郷は眼をむいて驚いている。

「驚いたな……」

「はつまさか凶星？」

「いや、ごめん。そういう気持ちは一切ないから安心して欲しい」

「……だろうね」

いざ言われると非常にムカつくけど、予想通りではあるからなんとか耐えられる。でも長女じゃなかったら耐えられなかった気がする。

「じゃあ、なんで？」

「俺もエロクラスなんだ」

「はい？」

意外な告白だった。自分のクラスを他人に明かす人はまだあまりいない。

エーやエニなら積極的に明かす人もいるが、エニ以上は正直言つて今の社会では障碍者<sup>お荷物</sup>だ。だから、もし本郷がエニやエトであつたとしても、知り合つて間もない私に自分のクラスを明かすようなことはしないでだろうと思つていた。でもこいつはそれをやった。恐らく自己開示をしなければ私の本音を引き出せないと判断したからだろうと思うけれど、それでもそうやって身を切れるというのは中々できる判断ではない。私は本郷の評価を見直すことにした。

「それで、同じエトの私となら分かり合えると思つた、みたいな？」

「いや……、それとも違う。単純に自分を晒したかっただけだ。君にはあまり理解できないことかもしれないけど、俺は友達全員が大事なんだ。でも、俺の友達がどんな奴らかは、君も見ただろ？」

「……そうね」

確かに本郷は嘘をついていないようだった。初対面のときに抱いたうさん臭さはまだ残っているが、これまでの短い関わりからでも本郷が基本的に正直で真面目な人間であることはわかる。だが、だからこそ信用できないということもある。逡巡していると、本郷は私の迷いを見透かしたように、

「少し、歩きながら話さないか？」

\*7

本郷が向かった先は、文学部の空き教室だった。現在、Σ大では講義の殆どがオンラインで行われるため、施錠の甘い教室のいくつかは知る人ぞ知るたまり場になっている。

「静かで雰囲気いいでしょ、ここ」

「そう？ 人気が無くて、今にも襲われるんじゃないかって雰囲気だけど」  
ガチャリと錠が回る音がして振り返る。

「健司君……?」

そこにあつたのは、余程驚いたのか、眼を見開いて立ちすくむ真夕の姿だつた。

「真夕、久しぶり」

一方の本郷は何事もなかつたかのように、さらりと受け答える。

「何してるの? 二人で」

一瞬、ぎよつとするほど鋭い真夕の視線が私に向けられたのを確かに感じた。

「あー、別に普通の世間話よ。たぶん真夕が想像してるようなことは一切ないから」

「千春には聞いてない!」

「だから、本郷君とは本当になんにもないんだつて! 誤解だよ!」

「嘘ばっかり!」

「嘘じゃないって！」

「もういいよ！　ちはるちゃんはいつもそうやって美味しいところばかり持っていくんだね！　私が本当に欲しかったものは全部持つて行って、それで私は残り物の処理ばかりやらされてさ。なんか、自分が不幸みたいな顔しちゃって、そのくせ私のことはバカにして。本当、最低だよ！」

溜まっていたものを全て吐き出すように言い放つと、バタバタと足早に私の横をすり抜けていった。

\* 8

「ちよつと待って、真夕ちゃん！」

余りにも突然の告白に停止してしまっていた私の脳を本郷の叫び声が呼び戻した。

「真夕！　待って！」



すぐさま真夕に追いつがるも、既に教室を飛び出した真夕の姿ははるか先だ。

「真夕！ 真夕つてば！」

勢いのままにもつれそうな足を必死に動かす。酸素が足りず、周囲の景色は引き伸ばされたように長い。

人気のない廊下を抜けて、二号館の方へ渡り廊下を疾走する。足が遅かったとはとても思えないほど真夕が速く感じた。

だがそれでも、じりじりと真夕との間の距離は詰まっていく。

そしてとうとう、階段を登り切ったところで私は真夕に追いついた。

「ねえ、真夕。わたしの話を聞いて。本郷君との間は本当に何も無いのよ」

「千春にはわかんないよ！」

絞り出すような叫び声だった。

「千春には絶対わかんない。私がどんな気持ちで千春と一緒にいたか、どんなに千春といるのが辛かったか！」

「そんなの、私もわかんないよ！ 一緒にいるのが辛いなら私に話しかけるのをやめたらいいじゃない。真夕は友達だって他にたくさんいたんだし、わざわざ私に話しかけてこなくなつて何も問題なかつたじゃない！」

「……ほら、全然わかつてない」

諦めたようにぼそりと呟くと、手すりを握っていた手をパツと離した。次いで、ふちに乗せていた片方の足を外へ踏み出した。ゆつくりと、目と目が合うのを感じるほどに、真夕の体がふわりと落ちていく。瞬間、弾かれたように私の体が動き出していた。一步、二歩、まだ、間に合う。いつか放課後にあの本を受け取つた、半分に割つたアイスを手渡した右手を伸ばす。あと数十センチ――。

「さよなら、千春」

突き飛ばした感覚を残して、真夕は私の目の前から消えた。一秒、二秒。ド  
ンッと叩きつけられるような音が響いた。

真夕を救うはずだった私の右手は、真夕の最後の一步となっていた。心臓が  
ギュッと縮んで、頭の血がサーッと引いていくのがわかる。呼吸が浅くなつて  
息が苦しい。冷たいはずの空気が突然耐えがたい粘性を帯びたようにのどに絡  
みつき始める。

どうして――

言葉は虚空に消えた。

## あとかぎ

どうも、笛野メノです。タイトルの『熱月』は「ねつづき」と読みます。フランス革命暦で七月下旬から八月中旬を指す月名だそうです。

今回は電子版での公開となりましたが、今後イベント等に出版して書籍版の販売などができればいいなあ、などと考えております。

---

（「熱月」 笛野メノ）

初めまして。落合です。社会人って辛いですね。

今回は時間のない中での製作となつてしまい、納得のいかない部分も多い出来栄えになつてしまいました。In Vitroとして初の作品ということで、どうかご容赦ください。

---

（「私と彼女のウェーバ」落合未知）

表紙を担当した遠藤です。描いた絵を人前に公開するのは初めてのことでしたが、足りない実力に対して（これを人の作品の表紙を飾るのか）と思うと無限にハードルが上がり続け、遅々として進まない線画、ラフ案全捨てなど、一枚絵ですが完成させるだけであつたのに締め切り直前まで苦しむハメになりま

した。反省することばかりですが、とりあえず自分が関わった本が出てくれたのは嬉しい。また機会があればイベントなどにも出てみたいです。

---

（表紙担当…遠藤風太郎）

いっぱい編集しました。たくさん寝たいです。電子版ということで文字サイズや余白をそれっぽく弄ってみたのですが、結果、がちやがちやしたレイアウトが生まれました。世知辛いです。

---

（編集担当…編集）



# Pathosologic Report (report 01)

遠藤風太郎<sup>1</sup> 落合未知<sup>1</sup> 笛野メノ<sup>1</sup>

<sup>1</sup>In Vitro \*†

November 22, 2020

\*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

---

\*Twitter : @in\_vitro\_lab

†HP : <https://invitroroom.wixsite.com/website>